

土 淨

四
月
號



金

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年三月廿日印刷納本
昭和十五年四月一日發行

第六卷 第四號

陸海軍 慰問浄土 病院

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に五千二百余圓の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆ 一口一圓二十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆ 御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

東 慈道 著 眞野正順師序

病める兵の手記

四六判二五〇頁 定價一圓二十錢 送一四

若き宗教學徒東氏が、年老いた母と若き夫人といたいいけな二兒を残して應召したのは昭和十三年の晩秋であつた。寺院に住まぬ僧侶東氏の唯一の苦惱はその日からの家族の生活であつたと思ふ。而し彼の泰然綽々たる態度は平生と何ら變る所がなかつた。

年少苦難の人生行路は宗教家としての自覺と相俟つて若き聖者の風貌にも似た彼の人格を礎き上げたのだ。今やこの最高峻烈な訓練の門出に於て、それが遺憾なく示されたと云ふ事が出来よう。従軍年餘、遂にたはれて異境に病む身となつた彼が病床四十度の高熱と闘ふこと月餘、今更に死と宗教と、友情と恩愛と、常識人としての彼が、死をみつめつゝ如何なる常識を絶した體驗を感得したであらふか。

言ひうべくんば、これは又、若き求道者が歩んだ人生三十年の記録であり、死への抗義である。戦争と死と恩愛を語る今事變が生んだ最高峰である。戦線銃後の慰問書として是非お求めを!!

これは三上卯之介上等兵の戦線彈雨下に於て得た貴重な血の體驗スケツチである。三上氏は又漫畫界の新進氣鋭を以て知られてゐる。

八隅部隊工兵上等兵
三上卯之介作

陣中漫画 スケツチ 癩風呂

戦地への慰問品として又前線勇士を偲ぶ必ず座右に!!

内容一般

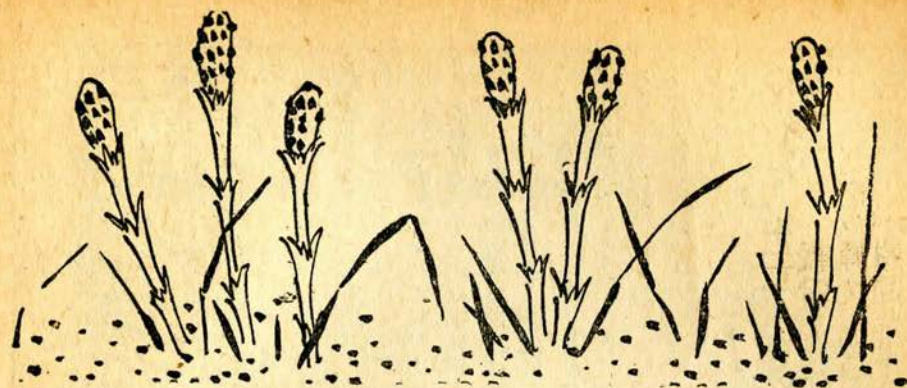
口繪(オフセツト色刷)結婚、支那兵、支那の支那兵、決死隊、他數點
陣中漫画 スケツチ 癩風呂
續書 文、連、ゲマンガ、ヒ、戦線ハ等兵、信ケツ野戦病、スケツチ、激戰地スケツチ等々

定價 一圓二十錢
四六判 二五〇頁 美本
送一四

發行所

東京市谷區新宿一〇番
資合會社

三友社



淨土四月號 目次

表紙・目次カット……………鈴木金平
扉繪……………中島保

三業清淨と淨土教……………清水觀碩(六)

二つの誕生……………佐藤賢順(八)

身邊
雜話

音・念佛・ひかり……………金田明進(一)

阪根翁のこと……………吉田絃二郎(三)

渡中將絶筆の名號……………江上秀靜(二)

信……………相……………談……………中村辨康(五)

淨土宗讀本の出版を待つ……………和田正系(四)

別時念佛に就て……………編輯部(五)



實話 天津の女性……………山田昇禪（一）

前線 警 乘 兵……………大羽四郎（三）

征 旅 の 回 想……………安田秀賢（六）

小説 店 の 中（齊藤清畫）……………一瀬直行（四）

戯曲 祇園精舎の戀……………須磨一郎（五）

小説 尼と地藏（鈴木金平畫）……………佐賀一海（四）

歌 壇……………與謝野晶子選（二）
俳 壇……………太田耳動子選（三）

心經 講義 智悲兩全の觀音様 中村辨康……………（五）

淨土宗讀本出版だより……………（四）
編輯後記……………（六）

淨土四月號目次……………

理化學研究所製品
帝國學士院賞受領
日本化學會櫻井賞受領
世界十一國製法特許



健康増進に ビタミン

過勞を回復させる

ビタミンAの不足は運動選手をスラムプに陥れると言ふ。全身の新陳代謝に大きな作用を営むビタミンAが體活力増進に、疲勞の回復に重要な要素たることは勿論なのであります。

風邪ひかなくなる

風邪の豫防にビタミンA・Dの効果は有名です。これからは過勞から風邪をひく事が多いから、風邪ひき易い體質の人は勿論、健康者もビタミンA・Dを充分に攝つて呼吸器を護るべきです。

推奨される純良品

古くは肝油、最近では種々の肝油劑がありますが、理研ビタミンは肝油から抽出した純ビタミンA・Dを豆粒大の小球に濃縮せる純良製品です。ビタミン含有量も消化吸収も斷然優秀で、健康増進に活潑な効果を信頼推奨されて居ります。

四〇球：二圓 一〇〇球：五圓 藥店にあり

株式會社 玉置商店

浄土

四月號

いけらば念佛ねんぶつの功こうつもあり、しなば浄土じやうどへまいり
なん。とてもかくてもこの身みには思おもひわづらふ
事ことぞなきと思おもひぬれば、死し生せい共どもにわづらひなし

法然上人御法語





三業清淨と淨土教

九品佛
淨眞寺
清水觀碩

此の度良き機會を得まして佛教道德の精神を御話申上げられる事を非常に嬉しく思ひます。

三業と申しますのは身、口、意、の三つで三業の業は、業務の業で、是を吳音で業と讀んで居ります。三業の中で其の主體となるものは意業でありまして、即ち心の働きを言ふのであります。

釋尊は『心は火の如し』と御示しになつて居ります。火は世の中に必要缺く可らざるものであります一面、世を損ふことも亦甚大なものであります。

火は炊事場でも、工場でも、其の他汽車、汽船等凡そ人間生活の上に一日も、否一時も缺く可らざるものであります。是を過失する時は自他の生命、財産迄も空しふするものであります。彼の大震災火災の如き焦熱地獄を現す様

な事もあります。

吾々の心も丁度其と同じ様に放任して所謂盲目的活動に乘する時は身を損ひ、社會をも損ひ害するものとなります。即ち五・一五事件、二・二六事件の如きも即ちそれでありまして。これに反して、心が眞に醒めて、覺醒的活動となれば、身を修め社會人生に貢獻するものとなります。是の點に於て精神の覺醒と云ふことが、人生の基調となる次第であります心が覺醒すると云ふ事によつて、身・口・二業が淨化されるものであります。

それですから人生とは、かゝる尊い心の覺醒によつて、有難いと思つて働き、愉快に働くことであります。日本では昔から眞人と呼んで居ります。所謂眞人間を意味するものであります。是を縦に見ますと、報本反始となり、

横に眺めました時には奉公犠牲となります。

宗祖に對して唯、有難いと念を起し、世の爲め、社會の爲めに、己を空ふして働く事であります。

教育勅語の中に天壤無窮の皇運と御示になりましたが、皇運と云ひ、國運と云ふのは要するに上下一心一體となりまして、覺醒した協力の外に、何物もないものであらうと思ひます。今や一億の同胞が國體信念に覺め、同心協力する時に國運は隆昌となり、國威は發揚するものであります。即ち同胞各自は國運を分擔して居るわけでありますから、一人の怠け、横着は國運の衰微となり、反對に一人の覺醒は國運の流を強うするものであります。

畏くも明治大帝におかせられては、

「朕に辭職なし」と仰せられました。嘗て某重臣が露々たる社會の批難を受け、辭表を閣下に捧呈致しました時に

「お前達は窮迫すれば其の職を辭して責任を免れることが出来るが、朕には一生涯辭職と云ふことが無い」と御

示しになりました。全く御生涯を通じて國運隆昌の爲めに、御盡瘁遊ばされたるは恐懼感激に堪へない次第であります。吾が淨土教は無限絶對の如來を信頼することに依りましてみ佛の尊い大御恵を戴いて如來様の御心のまゝに有難い

と歸命して働くことを教ふるものであります。

此の天地を貫く一大信念の上に生き、生かされて己を空ふして働く處に本當の人生が打ち開かれて來るのです。

この様な信念に生き働くことが、民族的に申しますならば、日本精神と云ふ事になるのであります。日本精神と淨土教とは其の深い根柢に於て、共通せるものであります。吾々淨土教徒は幾百年の歴史を通じて國運を翼賛して來ましたものであります。この様な信念の簡明にして、適切な修養法として宗祖法然上人は、稱名念佛を勸進遊されたものであります。

全く念佛は、眞の人生修養法として簡便なものであります。誰でも、何所でも、何時でも、唱へることが出来るものであります。唯信じて唱へさへすれば良いのであります。

古歌にも「唯だ申せ、申す内にぞ自ら眞の道に、いるぞ嬉しき」と

と御仰せに成つて居ります。かうして私共は念佛の信念に基いて、いつでも三業に作す所の罪業は猶水の火を消す様なもので、除滅して餘りなく、心器を清淨にして、道業を増長し、更に環境を淨化して國運の發展に併せて人類の進歩に貢獻致し度いと念願致して居る次第であります。

筆 隨

二 一 二
ふ たの
誕生 たんじやう

佐藤賢順



四月八日は釋尊の降誕せられた日である。
拘利城にほど近き藍毗尼園の春は酣で、
空には光、地には花、風は和かく、泉も池も
清かであつた。高懸欄楯は七寶を以て飾られ

て、伎樂が奏でられてゐる。こゝにかしづく
者は、顔容端正で智慧人に優れた若き婦女た
ち凡そ八萬四千、身を美しい璎珞で飾つた童

女たちが又同じく八萬四千、香華を持つて從
ひ侍べる。

かしづかれる主はカピラヴット國の國王淨
飯王の後、摩耶夫人である。懷妊の身の、日
月將に満たんとする頃を、この園林に養ふの
である。

四月八日、數多の侍女にかしづかれてこの
園林を漫步する時、無憂園と呼ぶ樹の、枝葉
も茂り花色も鮮かなるの下にて、世尊は降誕
し給ふた。扶け支へる者ともないのに、獸
王獅子の歩みをなして、自ら行くこと七歩し
て、右手を舉げて天を指し「我、一切の天人
の中に於いて、最尊最勝なり。無量の生死今
に於いて盡く。此の生に、一切の人天を利益
せん。」と高らかに言はれた。

空からは二下の、一つは温き一つは冷き
水が下つて初湯となつて身を樂しませ、梅
撒の細末香は風に從つて流れ、繽紛として亂れ
墜ち、井泉には清涼なる淨水が自然に湧き出
で、苑林には數々の珍らしい花が時にあらざ
るに齊しく開き、兎喜なる者も一時に慈心を

生し、世間の病は癒せずして治し、常ならば亂れ鳴く禽獸たちも、この日は叙として靜なく、川といふ川は流を停め、濁れる水も清澄にかへつた。

——これが經論に讃へられてゐる世尊降誕の時の説話の一節である。世尊がこの世に出で給ふたことの喜びの叙述は、それだけでは盡さない。この降誕が世に齎す大きな意義の幾分かを、如何にすれば叙へ傳へることができらうかと、佛傳の作者達は苦心をしたものであつた。例へば「佛所行讃」の作者馬鳴菩薩の如きは「須彌山は中央にあつて世界をしつかりと支えてゐるのだが、世尊が世に出でまし給ふた時には、功德の風が飄ふて大地は普く震動して、恰も風浪に弄ばれる舟の如くであつた」と大要姦な書き方をしてゐる。大地は歡喜に震へた、世界は、この日新なる光に照らされて、希望に微笑んだ。

生誕すると直ぐ獅子の如く悠然と七歩あゆんだといふ説話の意味は何處にあるのであらう。世界が新なる希望の光に喜び震へたとは

何のことであらう。七歩あゆむとは六歩を進み更に次の一步を踏み出したことである。六歩とは六道——我慾を中心として展開する人生と世界——に外ならず、個別的な存在に執心しての生活が、その結果を生み出し、更に又、その結果が新なる結果を描いてゆく絶えざる輪廻轉生の生に外ならない。七歩とはこの生を乗り越えて、決して退轉することのない生への轉入を教へる譬諭である。六歩目から七歩目へと歩みを運ぶことは、進歩とか發展とかいふ同じ連續的な平面での出來事ではなくて、根本的に異なる生の立場、物の見方、生き方への轉入である。我といふものの周圍に縁をなして集積する慾望を中心として、我を主として物を孤立的・個別的に見る見方、それに基づいての生き方と、一切を相依的・相互的・綜合的に見る明智を得て、これによつて我の周圍に凝集する慾望を一塵する生き方との根本的な相違である。このやうな生の體現こそ佛道を成ずると名けられる。

この教によつて世界は苦惱から救はれる。

世尊降誕の日、世界は會て見ざる新なる光に觸れた。大地が普く震動した」と傳へられるのも、單なる譬諭といふのには、餘りに切實なるものを表してゐるであらう。

四月七日は法然上人の降誕せられた日である。

崇徳天皇の御宇、長承二年四月七日の晝頃、美作國久米の南條、稻岡の庄の押領使、漆の時國の館では、丸々と肥つた男子が生れた。家中の喜びは言ふまでもないことであるが、その時、空には紫雲鸞としてたなびき、屋敷うちもの西の方にあつた二股の椋の期の、高く聳えて枝を張つた上に、白鶴が二流、どこからともなく飛んできて、梢に懸つた。空では錦鯉の音さへ聞え、光も一段と美しい。鶴は七日を経て天に昇つて見えなくなつたといふ。

——これが「勅修法然上人行狀畫圖」の作者が叙してゐる上人御誕生の時の有様である。今年紀元二千六百年は長承二年から數へて八百〇八年目に當る。作者はこれに附け加へて

「見聞の人々奇異の思ひをなさずといふことなし」とか「さだめてふかきこゝろあるべし」とか記して、この神秘の意味の解釋を、讀む人々の心に委ねてゐる。法然上人の生誕が日本精神界に齎した重要性は、釋尊の出世のそれにも勝る大さを持つてゐる。

釋尊の正法の眞實義を把えたものは上人であつたから、極端に言へば、もし上人の出世がなかつたら、釋尊の教行も日本に於ては眞に生かされることはなかつたであらうと言へる。釋尊の説かれた教は、四つの明かなる眞理、八つの正しい道、十二の因果の連鎖項など實踐を主とした簡單な教であつたが、それが年と共に發展し、時によつては正道を逸脱して、概念的に歪曲せられ、空、緣起、佛性などの複雑な教になつた。然し釋尊の眞精神は一切を生ける人格、生命として頂き、その大きな働きに歸命するより外のことではない。これが法然上人の磐石の如き確信であつた。人格とか生命とか言へば兎角われわれは人間を標準として考へ勝ちで、従つて擬人化

を行ひ易く、人間が小さければ小さいだけに小さな人格、生命を考へ勝ちであるが、われわれの頂く生命はかやうな相對的な擬人化や聯想によつて作られた生命ではなく、人間的な計ひを離れた無限にして絶對の生命なのである。かやうな生命に歸命することが如來に歸命する相である。釋尊が相依的・相互的な全體として諦觀せられたるものを、如來として合掌し此れに歸命するところに佛道の眞精神は現れる。

如來の當體は大願力である。願力とはこの生命の如々に衆生に働きかける力を言ふので如來が單なる絶對者として冷然と超越した、有限者なる人間と隔絶した存在でない所以はそれが願力として働きかけてゐる點にある。人間の知性で概念的に固定した絶對者は、相對者と交渉があるべきではない。もともと無限者と有限者との間は隔絶してゐる筈である。それが、この二つが結びついて、如來と衆生とが結繋されるのは、如來の當體が如々に躍動してゐる願力そのものであるが故である。

つて、こゝに超世の本願の端しがある。この本願に隨順する生活が念佛の生活であつてこれに於いて釋尊の教法は如實に實踐せられるのである。

「名號は萬德の所歸である」といふのは、念佛が全佛教の歸結である所以を表すものに外ならない。

釋尊が佛教の始祖であるが如く、法然上人は日本佛教の開祖であつて、最も日本的なる視覚から釋尊の教法の眞髓を把えてこれを端的に日本化したのである。上人以後の如何なる教説も、上人を考慮に入れずしてこれを考へることは出来ない。

日本の精神界は上人の生誕によつて、全く新な光に觸れたのである。生誕の折の奇蹟の意味を、

「さだめてふかき意あるべし」と書いたのは、誠に宜なるかなと言ふべきである。



堺市 木全 酒弘

巍々として山登えたり起伏するそ
の巖を纏ふ黄河の流れ

駿馬を曳くわが戦友の三人まで今
日の戦に近き悲しき

大尉の雄なる山川をよく歌つたも
のとして、前者を推す

國岡縣 三浦 壽子

父母の眼の濡れにけり

久々に戦地の子より便り得て見給
ふ父母の眼の濡れにけり

評 飯野我が母を送つた父母の心は常
に安からぬや。久しく生死を氣づ
かつたからたよりを得て、熱く涙を
こぼす様は讀者にも共感を得られる

東京 三浦 壽子

春の町たばこいささか求めけり人
訪ふ心ほのかに鳴るも

評 これはほのかな娘の戀心を花の香ほ
どに淡く表現したものでないか
思ふ人は訪はうとして、煙草を買ひな
がる例がすくなよきめきを覺えて
ある。全體にやさしく餘韻があるへ
を佳とする

京都市 永 丘 七 郎

沖陣旅の歌

ただ見ゆる石垣はこれ一色の青き
轟なり百里の城あと

中文派道軍 時岡 秀雄

遺言は「班長殿によろしく」とた
だ一言戦傷死の兵

獨逸軍人島根製鐵所 永 海 兵

病癒へず兵役免除さるる身の此の
頃さびし山しくれるする

栃木縣 大 輪 清

雪の嵯峨負ふ馬の嘶きて月夜に黒
しその姿のみ

小樽市 平 井 善 慈

名も知らぬ中尉の母御たづね來ぬ
ノモハン戦を泣き泣き云ひて

京都市 望月 久次郎

鉢の梅蕾ひらくや香の高し部屋開
け放ち晴ればれと嘆く

東京市 三野 輪 幸 節

朝夕に富士の白き日つづきたりひ
ゆうひゆうと吹く川風寒し

朝鮮 盤江 八年 坊

松葉杖たよれる身なり長病みて足
萎え痛み動かぬ我れは

山梨縣 伊 藤 久 次

旅にゐて故里を戀ふ我が心はるか
に偲ぶ親の情けを

山梨縣 伊 藤 久 次

いざ往けと雄々しき樂にみちびか
れ、出で行く兵の面は勇まし

北海道 寺 田 頑 山

ともすれば銃後を守る我れなりと
云ふ行ひのなきぞはづかし

埼玉縣 立 野 里 せ

ふかき罪ゆるし給へと今日もまた
祈る心ぞかなしかりけり

盛岡赤十字病院 菊 地 徳 七

ひたすらにやまひいやして國の爲
君のみためにたたざらめやは

香川縣 荒 木 は ち

きはみなき二千六百の年むかへさ
らに祈りぬ世のみ榮えを

徳島縣 丸 岡 長 壽

わたつみかはた大空かそはてに
雲とも見ゆれ紀伊の山々

北海道 花 田 順 佐

二千六百の年を迎へてかしはらの
昔をしのび今はげまなん

佐世保海軍病院 宇 部 祥 徳

靖國の神となりにしわがともは地
下にありても國守るらん

はがきに一回二首以内とし
「淨土」編輯部歌壇係あて
に送ること。

投稿規定

京都市 笠井 松 枝

ひあまれば心たらふも

東京 小 泉 妙 春

白衣なる勇士もいまは傷いて職
をたのしむたよりおこしぬ

小樽市 中 村 茂 舞

白樺の裏山づたひうぐひすが朝毎
に鳴くわが庭にして

徳島縣 海 部 山 人

思ひ出づそのかみの日に君と二人
この山に登り街を見しこと

熊本縣 小 原 ひ 美

亡き人の歌詠む宵や更けゆきて雨
となりけん音のひびくも

鎌倉市 吉 田 鉄 之 介

なき母が形見の雛をかざれよと待
ち伉び給ふ父のみこころ

会 津 齋 藤 華 舟

ならはしの蕎麥茹で終へて元朝の
山家住ひも慣れて安けき

小樽市 井 口 讀

病める身に母の情ぞうれしかり今
朝も身に沁む梅が香

山梨縣 伊 藤 久 次

旅にゐて故里を戀ふ我が心はるか
に偲ぶ親の情けを

山梨縣 伊 藤 久 次

いざ往けと雄々しき樂にみちびか
れ、出で行く兵の面は勇まし

北海道 寺 田 頑 山

ともすれば銃後を守る我れなりと
云ふ行ひのなきぞはづかし

埼玉縣 立 野 里 せ

ふかき罪ゆるし給へと今日もまた
祈る心ぞかなしかりけり

盛岡赤十字病院 菊 地 徳 七



SHIRO

前線
實話

警

乗兵

大羽 四郎

(文と畫)

敷物から土の上に摺落ちて寝苦しい
まゝ何度も寝返りを打つて居る。

シーンとした夜の空氣は發作的な
諷の解らぬ寢言で亂れ勝ちだ。

晝間の勇士も夜は赤子に等しく他
愛が無い。隣りの山本上等兵もボカ

ンと大きな口を開けて仰向けに正態
無く寝込んだ。その口からこの不潔

な空氣を呼吸して居るが一寸唇を歪めたと
思つたらムニヤ／＼と何か寢言を初めた。思

ひなしかなコツと笑つたやうな氣がする。多
分故郷の夢でも見て居るのだらう。

自分も故郷を想ひ出した。

昨日家から届いた慰問袋の手紙を又頭の中
に思ひ浮べて暗誦した。

父からは相變らずの候文でブツキラ樺に
書かれてあるが、其處に何となく情愛の滲み

出て来るものがある。

皆相變らずだが一寸アバートの兄貴が身體
が悪いと書いてあつた。こりや大變だ。餘程

悪いに違ひ無い。戦地の自分の處に知らせ
て寄越す位だから。その兄貴から四五日前に手

紙が届いたのだ。其後元氣で働いて居るか、
こちらは心配せずに國の爲に思ふ存分盡して

呉れ。少いが小遣を五圓送る。受取つて呉れ
自分は何時の間にか上衣から其小爲替を出し

妬るやうな暑さに支那家屋特有の汚臭を發
散させて二坪半程の平土間は一箇分隊の兵隊
が思ひ／＼の寢姿で一杯になつて居た。

アンペラや高梁を器用に消滅にしたその上
に戦友は寢て居るのだが、寢様の悪いものは

て居た。月明りに行軍の汗で染みだした斑點は兄貴の顔色のやうに青白かつた。兄貴は胸が惡いのだ。若しかしたら、いや自分の方が先に死ぬかも知れない。今迄は死といふものに就いて超越した積りの自分も兄貴が死ぬのではないかと考へたら、不思議と生命の尊さを考へさせられた。兄貴死ぬんぢや無い。自分が替はりに死んでやるよ。そんな病氣の處を小遣まで送つて呉れるなんて、濟まなくてジーンと目頭が熱くなつて仕舞ふ。

黄河河畔の明方の静寂が破れて進軍の合圖に目を醒した。出發の爲一個中隊〇〇名は麥畑の中に整備した。

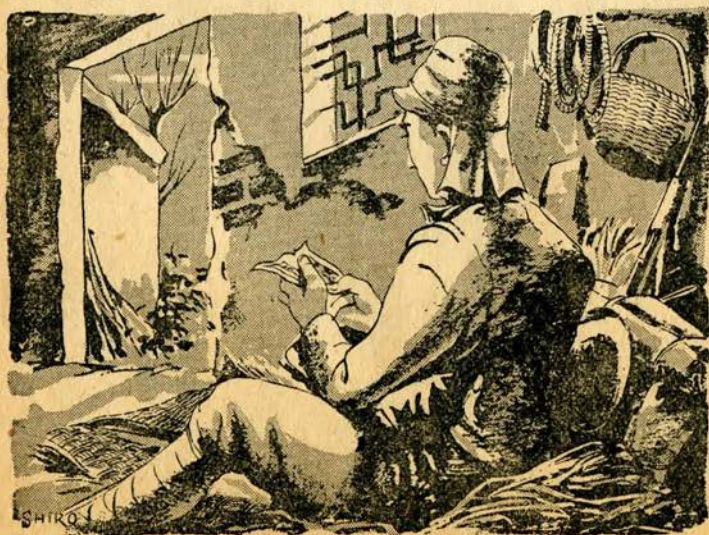
敵入路軍の八月攻勢は麥畑、高粱畑を利用して頑強に抵抗を續けて居る。

自分達十名は連絡の爲にこれから出發するのだ。トラックに黙々と便乗した兵隊の誰かが静かな中に緊張した顔の動きを見せて居る。一望高粱と麥、そして朝方に光る泥濘。トラックと一塊の兵隊は目的地に向つて進ん

で居る。「おい昨日な」と大山上等兵が自分に話しかけた。「〇〇部隊が黄河を渡河する時な。其處の特務兵の馬が二頭泥濘にはまり込

十過ぎの爺さんが、べちやくちや解の解らぬ雑談をして居るのが滑稽にも見えるし無邪氣にも思へて親しみを感した。高久上等兵は何

んぢやつて随分苦勞したが、ずんずん潜り込んで仕舞つてな、二頭共首だけ出して噺いて居たさうだがどうにも手が付けられない。やつと一頭だけ出したさうだが、あとの一頭は三エツ後の一頭はどうしたッ可哀想にそのまゝ死んで仕舞つたさうだ。自分は死といふ事に就いて又考へさせられた。馬、人、死、馬の死、人の死、戦地では誰が死んでも同じ感銘を受けるものだ。どんな生物でも死といふ事に對してはすべて平等なことだと思つた。途中民間のバスと一緒になつた。トラックに續いたバスの運転手は兵隊上りの若者で生國は土佐だと言つて居た。乗客は七名。女は半島の婦人一人で、あとは支那人の中年者から大陸的な顔の六



か女の話をして居たが『おいあのバスの女シヤンだな、何とか連絡付けんか』と側の細島一等兵に話し掛けた『ハッさうでありますか』と大真面目に答へたので一同腹を抱へて笑ひ出した。

最早本部からは五六里離れて居るであらう夏の日に照らされて動いて居るのは二臺の自動車のみ。『あゝ喉が乾いた。この邊で水が呑みたい』と誰かつぶやいた。突然トラツクが急停車した。路にはまだ生々しい藪が掘つてあつたのだ。『畜生又こんな悪戯をしやがつて』福田上等兵がいま／＼しさうな顔をして下を覗いた、その外は別に變つた事も無い、周囲も静かだ。

二百米程離れた高梁の穂ものんびりとした大陸の風に心もち揺れて居る。早く車を壕から出して前進しよう、こんな考へを誰も持つて居た時。バリ／＼と一齊にチエツコ機関銃の射撃の音を感じた。戦友は皆トラツクから飛下りた。

『しまつたッ』

敵兵は遂に包圍隊形を取つて居たのだ。トラツクとバスをバシ／＼と打抜く音が物凄しい。

『應戦しろ、打て々々』

と分隊長が怒鳴つた。ダマツ／＼味方の機関銃が心地よく鳴響いた。敵は數を頼んでだん／＼接近して來た。最早友軍の彈は残り少なくなつた、敵々最後かと思はず御守袋に手をやつた、腰にしつかり付いて居る事が解ると何か力強い氣がした。今迄夢中で氣が付かなかつたが、バスの乗客は車内にへばり付いて居るらしい。かう彈が非道くはそのままじいとして居た方が良いのだ。怪我が無くても呉れ／＼が良いが、こんな激戦にこんな餘裕のでものも不思議な位である。敵は益々猛射を浴せて來る。

もうどうにも仕方がない。

初めの十二發持つて居た機関銃の彈は最早三發よりない、自分が何時の間にこんなに打つたか夢中である。この一發一發が命より尊いのだ。味方の機関銃は故障らしく鳴りを鎮

めてコトリともしない。

『こりやア如何ん』自分は機関銃の彈の三發目に手を掛けた。筒に彈をサツと入れて身を引いた。グズーン。彈は發射された。

『神様、出来るだけこの畜生に好果がありますやうに』

かう心に念じられずには居られなかつた。幸ひまだ戦友には負傷者は無い。『機関銃よりんと敵を殺戮して呉れ』だが彈は後二發しかないのだ。心細い事おびたしい。

すでに戦闘初めてから二時間餘だ。本部とは全然連絡が無い。最早絶體絶命、敵は容赦無く打つて來る。

『チエツ』

その時、無電士の村土上等兵が叫んだ。

『ようし俺がトラツクの無電を取つて來るぞ掩護射撃をして呉れ』

彼は決死の表情と責任感で、キリ、と口一文字に引めて前方に身構へた。

『村上頼む』

分隊長が怒鳴つた。じつとトラツクを見つ



SHIRO

めて居た村上上等兵は準備終りの聲と同時に射撃を初めた小銃の音に答へてタッタタッタと。トラツクに駆け寄りサツと身をタイヤに

齒がみ付かせた。その時、バシンと一發トラツクに當つた。やられたか。最後の頼みも駄目になったか。と思つて居るとやをらし身を持上げた村上上等兵は勇敢にトラツクに攀上つた『取れたッ』と無電器を抱へて眞逆になつて落ちたやうに飛び下りた。

『萬歳——』

戦友が一齊に叫んだと同時に村上上等兵は無事無電器を抱へて壕に轉り込んだのだ。早速無電はコチツコチ／＼と打出した。十分。二十分まだ連絡が付かない。電鍵を打つこの手先に十幾名の命は置かれて居るのだ。村上上等兵が無言なら皆無言で電鍵の動きを見つめて居る。

五十分、噓やつと連絡が付いた。應援が見えたら最後の一發を敵陣に御見舞申さう。

『ヤッ應援が来た』

壕に自動車のエンヂンの音が聞え

て来た。『早く／＼来て呉れ』その二三分が一時間にも感じた。トラツク三臺にぎつしり乗つた援軍が先頭に日章旗を熾然と翻へして全速力で疾送して来るではないか。目頭がずーんとしてトラツクが一塊になつて見えるだけだ。戦友も皆泥だらけの顔に涙を流して居る。

中隊長が先頭に日本刀を振り廻しながら馳けて来た。何も言へない。唯感謝のみだ。

應援隊は直に追撃戦を演じて居る。その後姿を見て神々しい感に打たれて、思わず手を合せて。チエツコ機銃銃が遠く壕に聞える。

やつと我に返つた戦友達は戦闘後の静けさをつくづく味つた。

薬袋の四散したのも急場の土壕の後もすべて血闘を物語つて居る。

『やつぱり俺達は生きて居る』と誰かが感じて居る。死ねば何も解らなくなるのだ。——生きて居ればこそこの自覺だが其の自覺が不思議に思へるのだ。

南支那の雄飛！

江上秀静

渡中將絶筆の名號

□□□ 江上秀静 □□□

先日さる大學教授の談として聞いたことは、我が日本人の中には色々の階級の人がある。乃ち西洋人は優良な人種であつて我々より優れた文化生活をして居ると思ふ人や、物質文明は先んじてゐるやうが精神的には我々の方が勝れてゐると考へる人、又はいづれの方から見ても日本人は西洋人に決して劣りはせぬと信じる人など様々の人があると云つた風な話であつたと記憶する。

私の耳に聞いた聲では渡久雄中將の如きは、その中の頭腦にしろ、何にしろ日本人は決して彼等に劣けはせぬ、世界で一番優秀な國民であると思つて居た人である。その信念を聞いたせいか、我が閣下は何となく奥深い透明さを表はして居られた。軍人には少し優さ形と思はれる體格であつたが、久留米第十二師團長として、その管内の馬質調査に廻られた時には、毎日十數里の

騎馬旅行を強行せられたものだ。でも細心な騎生家と想はれるのは早寝の實行、清潔整頓したその身邊からして窺はれたことである。低地の官舎にはたゞ一人で、身邊の始末は姫御とお女中さんが辨じて居られたらしく、夫人は東京のご自宅に居て聞いた。逆も忙しい軍務の中から副官や、部下の將校と一緒に私の居る寺に參拜して頂いたことは、まことに光榮の至である。それはその前に私が閣下にお遭ひした時、閣下は古美術、古代文化の造詣が深いと見えて、その方面の話には趣味を超えた専門的研究を承つたので、私の居る寺の本尊の國寶佛を始め、善導寺、その他久留米市附近の國寶關係の處をご案内するお約束をしたからであつた。

ところがお出を頂いた時は私は大分、別府の方に用件があつて旅行して、その歸りの汽車に乗つて居た頃であつた。寺の院代が多分この汽車で歸りますから廿分許りお待ち下さいとお願したとき、確かに歸られるなら待つてもいいが、ハッキリせぬなら又この次に出

直すとしよう。今日は自分が前以て時日の間ひ合せをしなかつたのが悪かつたと云つて歸られた。ほんとに惜しい機会を逃がしてしまつた。私はその自動車が立去つた五分間位して自坊へ歸つて來たのである。

この参詣の時中將はお寺の本堂の中に座して、他の將校の方々に、お互ひ軍務に忙しいものも、時に斯うした殿堂に参拜して静寂に浸ることは大切なことだねと言はれ、勧めもされたと聞いて、私は言ひしれぬ敬虔な思ひと懷し味を感じたことであつた。その後官舎には二度ばかりおたづねした位で、ある朝新聞を見て四國の方に轉任のことを知つてビツクリした。そして時日は明日といふ日であり、何にも斯もない。筑後路の案内はこれでお流となつた淋しさ。

私はその時からはからずも小包郵便を受取つた。それは中將の立派な書體で書かれ、そしてご自身に荷造りせられたものである。勿體なく開いて見ると墨痕淋漓、而も何と云ふありがたい感じの溢れたことか、一流その道の

徳者とも云ひたい文字で、「南無阿彌陀佛」と書かれてある。私は讀んで頂き、ありがたく念佛したことである。

中將御出發の汽車が、軽ひ等の機を通過するので、その時刻にお見送り申上げたのが最後のお別れであつた。

「あのお名號はね、僕がお幸へお参りする事が出来なくなつたから、官舎で参拜した心持で書きました」

その後四國の官舎から頂いたお手紙も今は記念となつた。久留米の五少將にお會ひした時四國に講演の途次、渡中將にお目にもかかり官舎では夫人にもお會ひした。官舎は久留米より或ひは落着いた住居ですよと奥さんは仰有つて居たと五少將からお話聞いたが、さてそのすぐあと、ある夕方ラジオのニュースを聞いて居ると、渡中將の死を告げて居る。北支の〇〇にてご病氣、續いて逝去され、ご遺骨云々。

私はビツクリして初多の一日、博多街はづれ雁ノ巢の飛行場へ歸けつけた。午前十一時

十二時、一時、待てども／＼中將のご遺骨は來らず、私だけではない、新聞社の人々も待つて居た。飛行機はもう何臺も降りたり、上つたりした。その内事務所の人が通知を受けたと知らして呉れたのは、ご遺骨は陸路下關經由東京へ向はれたといふことである。

斯うして惜しくもお遭ひ出来なかつた。私は下關の方向に合掌し念佛し、海風寒ひ松林を眺めながら立去つた。

中將のお名號はあれが絶筆に違いない。この正月は床に掛けて拜んだ。(寫眞は渡中將の絶筆の名號)

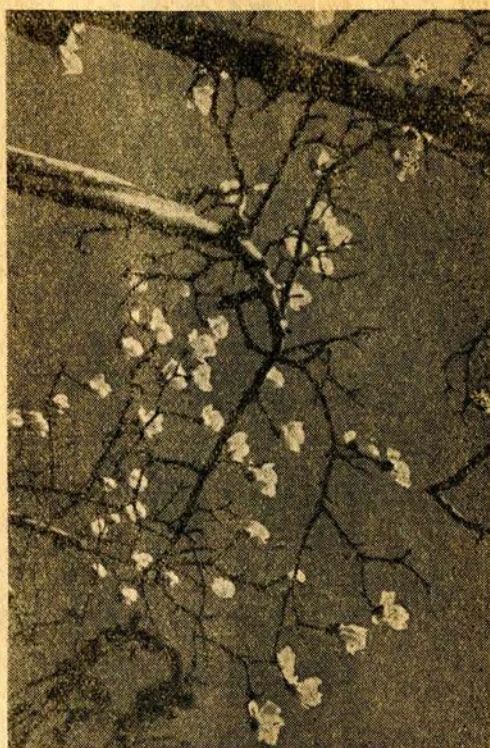
小樽市支部淨友會の活躍と外護

小樽市直行寺の淨友會は野村定貫老師指導の下に、多數の會員を擁し堅實な支部として例月念佛會、座談會などを開いて信行の策勵に努めてゐる。本年一ヶ年の毎月の行事豫定表も出来て本部宛通報せられた程で、堅實な發展を希念して止まない。尙去る一月の新年念別會の席上、南野、平井諸氏の發議で維持會加入の議が經り、南野三郎會長の名で、維持會費一口(金三十六圓)を申込まれた。

身：邊：雜：話

音・念・佛・ひ・かり

金田明進



た日の翌朝のことです。ふと目がさめると、まだうす暗くて、女中が店の入口の戸を一枚だけ開けて何かしてゐました、フト私の耳におりんの音がつけて二つ聞えました、始め私の氣のせいかと思ひましたら、主人も、おやりんの音だ、お佛壇のおりんだ、見てこいと云ひます、私はお佛壇を見に参りますと、別に變つたこともなく、おりんも亂れてゐませぬ、不思議なことだと思ひましたが、そのとき、私には、とても力づよい有難い心持ちが思ひ起されました。

「それは、長男は應召して征つた、けれど佛さまが、きつとお護り下さるのだ、御先祖さまがきつと長男の上をお護り下さるのだ、大陸のどんな處へ行つても、きつと立派に働いてくれるのだ、心配はない、心配はない、といふ考へでした。

「その日訪ねて来てくれた親戚のある人に昨日出て征つた長男のことを話してゐると、フトこの朝のおりんの音を思ひ出して、それを話し出さうとしますと、主人は、そんな話は

おりんの音

これは先日私の町の或るお料理屋さんの御

法事に招かれたとき、その奥さんがつくづくと語られたことです。

「それは、ちようと、長男が應召して家を出



大掃除の餘徳

山崎 善一

よせと申しました、おりんの音について私の考へは主人の考へと幾分ちがつてゐたやうです。しかし、私はあのおりんの音を佛さまの御先祖のお護り下さるおしるしとしか信ぜられなかつたのです、長男はそれから三ヶ月入

警訓練されて今では一旦歸郷して居りますが、何の障りもなく、又いつでもお役に立ちたい氣持ちで働いてゐてくれます。日ごろ御信心させて頂くおかげで、おりんの音一つにもこれほど有難いお力を頂くのかとよろこばれたことですよ。

どんなことに會つても、それを明るくよき方へ解釋させて頂くのが信ある者の力強さだと存じます。同じことを、暗く考へたり悲觀的に見たりするのとは正しい信仰ではないと存じます。どんな不幸に出會つても、どんな困難に出會つても、力のかぎりをつくしてあとは素直に、如來さまにお任せして、明るい軽やかな心持ちで居りたいと存じます。私は次のやうなお話を榎尾先生から承りました。

大正八震災のとき淺草の觀音さまのお堂がそのまはりはスツカリ焼け野原となつたのに、嚴然と焼け残されました。

これを見た、ある信心ある職人が、觀音さまにお参りして、「あゝ觀音さまは有難い、み

んな焼けてしまつたのに、觀音さまだけがあのこりなさつた、有難いことだ、どうぞそのお力で私を……」と拜んでゐる、多くの善男善女がみなこのやうにお参りした、これを見たある大學教授が「つまつらぬことだ、觀音さまに参る人達の氣が知れぬ。もし觀音さまがほんとに有難い方なら、自分のお堂だけは焼けても、あたりの家をみんな救つてくれる筈だ、まはりがみんな焼けてお堂だけ残つたとて何が有難いのだ……」と云つたさうですがこれは信仰あるものと、信仰なきものとの違ひであるといふことです。

信仰ある人は、もし觀音堂だけが焼けてしまつて、その周圍が焼けなかつたとしても、「觀音さまが身がはりになつて下さつた」と有難がることでせう。信仰なき人は、そんな場合「なんだ自分自身が焼失するやうな粗忽な觀音が何で他のものを救ふ力があるか」とやつぱりけなすことでせう。

信仰ある人には焼けても焼けなくても有難いのです。信仰なき人には、どつちにしても

有難くは感ぜられないのです。なまじ、知識があり、學問があるために、すなはな信仰が得られないことが多いのです。

法然さまの「一文不知の尼入道の無知のともがらに同じうして、知者のふるまひをせめて、たゞ一向に念佛すべし」とのみおしへが有難く拜まれます。

ほんとうに、信仰は學問でも理屈でもないのです。何んなことに會つても、明るく力強く、有難く受け取つてゆけるのが信あるものゝ尊さだといふことを、私はこの「おりの音」のお話をきいてゐるうちにしじみと感ぜられました。

口 先 念 佛

常總の野はひろく、晴れた春の日の下に果てなく露がつて、はるか彼方に紫の筑波山がそびえ立ち、繪のやうな田中の驛道を私は自轉車のベタルを踏んで、朝の爽かな空気を充分呼吸しながら中學へ通勤するので、私は同行の岡部さんと誓ひ合つて、自轉

車に乗つてゐる間はお念佛を申すことにしましたので、その朝も、いゝ氣持ちになつて、筑波山を眺め、ひろ野に滲る朝の大氣の中を走りながら稱名して居りました。

學校に近づいたころ、突然私の自轉車の後の方から「おーい、おーい」と呼ぶ老婆の聲がするのです。最初は私を呼ぶのでないと思つて、念佛をつづけてゐましたが、益々大きい聲で呼ぶので、フト自轉車の上から後を見ると正しく私に手を上げてゐるのです。そこで自轉車を下りると、なるほど自轉車の後につけてあつた私の教科書とお辨當箱の風呂敷包みが、今にも落ちさうになつてゐるので、

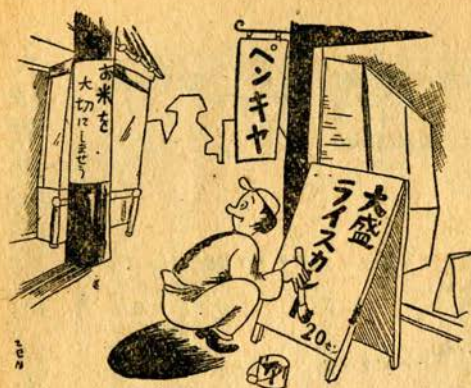
後からその老婆がやつて来て、「氣をつけた方がいゝぞえ、おらが前の金兵衛どんは、この間自轉車の後につけた荷物をおとして、二百兩がとこ無くしたよ、よく氣をつけねえといけねえだよ」と云つてくれました。

私はこのお百姓のお婆さんの、率直な親切な忠言に對して、「お婆さん、有難う有難う」

と盡きせぬ氣持ちでお禮を云つて、その風呂敷包みを、しつかりとくゞり直して自轉車に乗り、も一度後を向いて手をあげて禮を云つて學校に向ひました。

このとき、私は深く次のやうに感ぜさせられました。「お念佛を申し申し自轉車を走らせ、てゐたのに、自分のすぐ背後にこんな粗忽なことがあるやうでは、それはほんとの念佛でない。自分の脚下が暗いやうではだめだ、あのお婆さんの聲は佛さまの尊い救いの言葉だ、思へば現在の私はまだまだ口先だけの念佛だ、私の仕事も、私の家庭も、まだほんとうのお念佛の仕事になつてゐない、ほんとうのお念佛の家庭になつてゐない。……」と。

恥かしい思ひが私の胸にこみあげて來ました。「脚下を照らせよ！」足もとを明るく！」とは常に教へられて來た聖句です。念佛しながら、自分の荷物を落してゆくやうでは何ならない。念佛しながら自分の仕事を誤つたり、自分の家庭を暗くしたりしたら、ほんとうに申譯ないことだとつくづく感じました。



そして私は、それから筑波山を仰ぐたんびに、また、自轉車へ乗るときどきに、あのお婆さんの忠言が、私の耳にひびいて来て、尊い説めとなるのです。

阿彌陀さまは、いつ、どこでも、私たちに親しく呼びかけて下さるのです。有難いこと

看經屋御殿 山崎 善一

「どうも描きにくいネ、これや」

です、勿體ないことです。

ひ か り

私の寺の門前に、このごろ一人の盲人の撥摩さんが越して來ました、ちやうど乗合自動車乗合自動車の停留所停留所のとなので、車を待つてゐるとその撥摩さんの家から、トントンといふ音や鉦かねで木をけづる音が聞えます。誰か大工さんが修繕修繕をしてゐるのかと、ちよつとその家の中をのぞくと、こはいかに、この盲人の小林さんが、大工道具をわきへおいて、今さかに鉦で板を削つてゐるところです。これはこれは、目あきの私等でも、素人は仲々驚愕がつて、鉦蓋一つ鉦蓋の纏ひも出来ぬのに、この小椀盲人は、箱の蓋の込み入つたのを作つてゐられるのです。鋭い感覚で、何のよどみもなく、スラスラと板を削り、釘を打ち、新しい箱が今にも出来上らうとしてゐるのです。

「仲々御精が出ますね……」と普通のお世辭の言葉は私は投げたが、その言葉以外に深い感じを與へられました。

又、私のとこに昨年まで働いてゐた中年の男で、梅さんといふのが、これは又驚奇な運命の持主で、四十を越えたけふまで、自分の父母の名も年も、その母の生死も全くわからず、弟も一人あつた筈だが、勿論それも不明、戸籍は、東京のある所で兵隊検査のとき修繕したといふので、それを見ると、父母の職にたゞ「不詳」と記してあるだけ、話をきくと「自分が三歳のときに、お母さんが一歳の弟を連れて家を出した、お父さんがそのあとを追つて探しに出て、どつか遠いところで自殺した、が親戚のものも、それを手取りにゆかず、自分は伯父の家にあづけられ、それから暫く、子守やら小僧にやられ、東京で大工となつた」といふことです。ところが不幸な人にはどこまでも不幸がつきまとふもので、二三年前から兩眼がそこひで、かすかに見える程度の視力となり、外を歩くことも出来なくなり、昨年の春、殆ど盲目となりましたので、自分の希望で養老院へお世話になりました。

★陸海軍病院慰問「浄土」寄附者芳名
(敬稱略)

一月十八日より三月二日まで

六一六一一
圖圖圖圖圖

青森縣東津輕郡平館村
中野區江古田一ノ六
堺市大町二丁目
三重縣飯南郡柿野村
滿洲國開原朝陽街
樺太敷香町東一條北一

五
圓

群馬縣太田町長念寺氣付

— — — — —

五
口
五
二

〃 〃 〃 〃 〃
〃 〃 〃 〃 〃

拾一一一一一一二
圓圓圓圓圓圓圓圓

[illegible]

御寄附を御願ひ致します

表紙のうらにこの白衣の勇士慰問のための御寄附募集の廣告が出ておりますから御参照下さいまして、奮つて御應募下さいます様願ひ上ます。(係)

〃〃〃 姥源光西河古丸
〃〃〃 子空照 盛谷尾
昭雪み省寺 寺泉 鐵忠傳
枝枝上一内付寺造造山

この氣の毒な梅さんが、私の家にゐるとき
風呂場ふろやうに下る所の踏み臺ふみだいを作つてくれたので
す。見えぬ眼めで、背せの腕うでの覺えをたよりに、
そこから林檎りんごのきれ端はしをあつめて來て、假かり
つてくれたこの踏み臺ふみだい、多少いがんではゐるが
がしつかりした四つ足のついたもの、一年の餘あま
毎日用まいにちようひてもまだしつかりして役に立つてゐる
ます。私は風呂へ入ると、いつもこの踏み臺ふみだい
の作り主しゅ、梅さんを想おもひ浮うべ、たゞならぬ感かん
謝しやを捧たもげるのです。そして、時々、あの梅さ
んを見舞みまつてやりたい、力ちからをつけてあげたい
と思おもふのです。

梅さんは、いまごろ、養老院やうらうゐんの作業所さぎよじょで、
おとなしく、盲目めくらめの不ふ幸しやうな病友びやうゆうと共に興きようへら
れた作業さぎよをしてゐることでせう。小林盲人こばやしめくらめの
箱はこのふた、梅さんの踏み臺ふみだい、どれも暗くらいの中なかか
ら出た尊そんい光ひかりりです。どんな不幸ふしやうの中なかにも、
どんな苦惱くなうの中なかにも、けつしてへこたれては
いけない、み光みかりりに生きゆく道みちがあるのだと
いふことを教しへられます。

(をはり)



名古屋 堀場 典雄

俳壇 太田耳動子選

多度山の雪の干菜をさまたげず

評 すべて固有名詞は句の内容を助ける以外、無闇に用ひてはいけない。此の場合、どんな山であるか不明であるが、文字から受ける感じは、藪の村に相當山の雪を降らしにけるやうに思はれる。が其の爲めに軒に吊つてあるやうな干菜をさまたげではないと云ふのである。多度山を控へて雪に埋るる平和な村が想像させられる。

小樽市 高瀬方 井口 晴

熊笹の香なつかし蝦夷の春

評 熊笹に香があるべしと思はれない雪の上にあはれてある藪の色をなつかしみ見て、それが如何にも香でも放つてあるやうに感ぜられたことであらう。取るに足らぬ熊笹のやうなものでも斯う表現されると蝦夷の特徴が良く出てゐると思はれる。

石川縣 西村けん治郎

圍爐裏に坐りて議事を進めけり

評 村會の議事も進めてゐるのであらう。ほゞ笑ましい光景である。熱湯をしたり、だぶとんの股引を見せたり古

びた洋服を着込んでゐる、議員達が眼に見えろやうだ。

山口縣 長岡 白朝

用水を温みし水と汲み替へし

後岸會に詣でゝ歸る寒さかな

小樽市 西田喜四郎

飛んで来る鶴の懷し蝦夷の春

島山町 菊壽 云海

入營を送りて雪の峠かな

青森市 高松 昭瑞

開場のベルは寂しく松過ぎて

小樽市 青木 影子

波の色春となりたる岡に立つ

三陸市 山田 説有

今や吾子の寫眞を添ひて雛祭

三崎陸軍病院 水明子

王子酒に風邪養ふや春の雁

東京市 白土 登子

ほの暗きところに寝釋迦をしけり

北海道 花田 順範

春風のそよぐところや日の御旗

北海道 花田 順範

寝もはや白梅白く暮れ残り

岸和田市 田中秋 芳

地蔵尊に春のさしやき藍の臺

東京市 三野輪幸郎

シネマ街燈火さむくいまともる

會津縣 藤華 舟

沁む陽に慄なく襦をたてかけぬ

東京市 田村 春子

早春の街へ樺太く歸還兵

堺市 笠井 松枝

草餅や古里の母思はれて

東京市 森田 法晃

遠めいて石山寺の春の鐘

名古屋 友淵 青歩

春雨に古りたる松や祈りけり

香川県 荒木 はち

降るほどにあたら消えゆく春の雪

三島町陸軍病院 高安 和夫

春めくやバス發つ後の砂ぼこり

名古屋 福田 眞吉

春浅き裾を空に枕打てり

徳島縣 丸岡 長壽

暖き雪にうれしみ子等の傘

大阪府 木野 隨光

噴水の高きに御空はれわたり

大坂府 木野 隨光

年の瀬を干太根の細り哉

名古屋市 堀場 典雄

轉りの是ればやみて晴をまつ

大坂市 森 正義

流星の光芒白き寒の風

奈良 和田 幸地路

雪つぶてみな先生をめざしけり

石川 西村けん治郎

うつら／＼居眠りもよしひなたばこ

小樽市 平井 善慈

縮みても伸びても床の寒さかな

中田市 間瀬 鶴路

鐘ませる玉砂利など神の春

山梨縣 程 原 幸造

初かすみ無量無邊にたなびきて

滿洲陸軍病院 風間 市清

春を待つ夢は故國の墓所

徳島縣 海部 山人

鷗とぶわだつみ紀伊の山は春

小樽市 中村 もん

梅園の月銅像に冴えたり

梅園の月銅像に冴えたり

投稿規定

官製はがきに一画二句以内
とし「淨土」編輯部俳壇係
あてに送ること。



説 小

店みせのの中なか

一 瀬 直 行

直吉は床屋の前をたん行き過ぎてからふと気が付き、あごを撫で別にのびてもなかつたが、又もどつて來た。減多に入つたことのない床屋だつた。

何か又町のこぼれ話を聞くことが出来るかもしれない。往來から店のたて込んでゐるのを見て入る氣になつた。

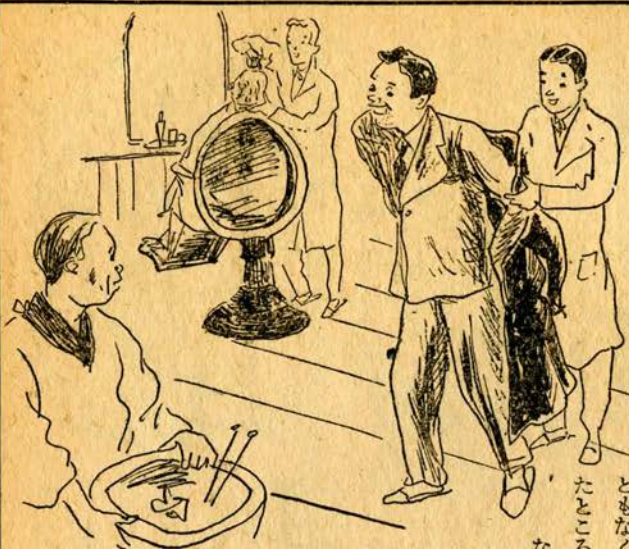
この頃ではさうした町の色々な姿に觸れかくされてゐる彼等の生活を覗くことに一種の興味があつた。興味と云ふよりその度におぼえる怒りを強くした。彼等は常に周囲をはかり寄るとさはると、黙つてゐるべきことを黙つてすこせないで、ひそ／＼

と語り合つた。よりどころのないくらしを何とか人から救はれた。中には同じ惡を抱いて榎手をさぐつて己の惡のより小さいのに、ほつと安心したい。さう云ふさまも見うけられ、どつちにしても思ふこと、することを思ひきり口に叫べない町の徒輩であつた。

事變も四年目になると、それ／＼の生活が變つて來る。當り前のことである。むしろこんなにおそく、こんな風な變り方になるとは想像しない。だから反面に肝心かなめなところで少しも變つてゐない。或は惡く變つてゐるのではないかと疑ひを抱く。

先づ最初に考へたことは、戦争となれば一國をあげて、それ／＼持つてゐるものはさけ出し、みごとに最後まで勝利に戦ひ抜く。直吉は思つてゐた。單純だが正しいと信じる點、今日も尚變りがない。

戦争によつて金儲けをした一群と、そのために生活を失ひ追ひつめられてゆく一群と、この二様の姿がはつきりとかたちをとつて現はれて來た。長くなれば困難の生じるのは當然、それをしのいで勝つ。これは鐵のやうなものだ。ところが、ぬけ／＼と成金になつた奴ばらが町をよこしてゆく。この火事場泥棒は足裏に踏みにじつてもあ



きたらぬ。一匹や二匹ではない。

それは直吉のやうな夢を喰ふ詩人の怒りと云ふかもしれない。至極この世のことはさうわり切れることばかりではない。が、この一事にかけては断じてわり切れなければならぬ。と云へば、どこからともなく卑屈なあざけりの聲が耳に入る。

この頃では人の多く集るとへば風呂屋とか、床屋とか、飲食店とか、雑多な人の集合する場所へ一人でも入つていつて、きくともなく周囲の話を耳をかたむける。きいたところでどうすることも、どうする力もないことはよく知つてゐる。それでゐて、渦に巻かれ、何かしらふるひ立つのだ。

殆どがこの世のうらをかく金儲けの語で自然縦をよせ、低聲にぼそ／＼と語つてゐる。この戦時下の情勢にあつて、この品をどこへどうやつてどう儲けるとか、今のうちならどこそこに片よつてある品をこれ位にまで買つても、手持ち品として儲けるとか、それをどこへ持つてゆけばどれ位儲かるとか、素人の耳に

もさうと感じられる話ばかり。うつかりして己のあり場に錯覚をおこし、おれはどこの人間であつたかしらんと思ひ直す。精神のこなぞ爪の垢ほどもない物慾にとらはれた獣である。

直吉の弟二人は戦地へ行つてゐ、二人とも前線にたつて今日明日の生命もわからぬ軍務についてゐた。一時も氣のゆるむことがなく、絶えず職まし續けて來てゐるが一面さうしたことによつて、自ら少しでも心におごりと云はうか、おもねることがあつてはならないと、常に心をしめてゐた。それがさうしたことを見たりきいたりする度に、矢張り徹へても抑へきれない感情となつた。

彼の顔を見て、舌を上げた床屋の親爺は腰を浮かしてゐるらしやい。」と云つた。横から小僧が外套と帽子をうけとつた。氣の入つた客とさうでない客と主人の應對は露骨に違つた。いやな客には口もきかなか

つた。椅子が一ぱいなので嘔で待つた。

その時、向うの端で顔をあたつてゐた客は、

「まんまとひつかゝつてしまつてね……」

まさかと思つたが、こつちは喉から手の出る程欲しいもんだから、みす／＼足元をみられて四十圓かたられてしまつた。」と若い職人に語つてゐた。

こつちから客の顔はかげになつて見えなかつたが、聲の様子では年の頃五十を過ぎてゐる。綺麗に髪を撫でつけた職人の片頬には小さな痣があつた。店には新しいが、腕きゝであつた。

「その男ならうちへも籠をかついでよくやつて來ますよ。三十がらみの丈のひよろつとした男でせう。ねえ、親方、來たことがありますね。」と客からかたつた男の様子をきいて、職人は親爺の方へ顔を向けた。

煙管を火鉢のふちにたゝきながら「あゝあの男ですか、柱あたりからひものや野菜

をかついで賣りに來ましたが。それがどうしたんです？」と親爺は膝をのり出した。

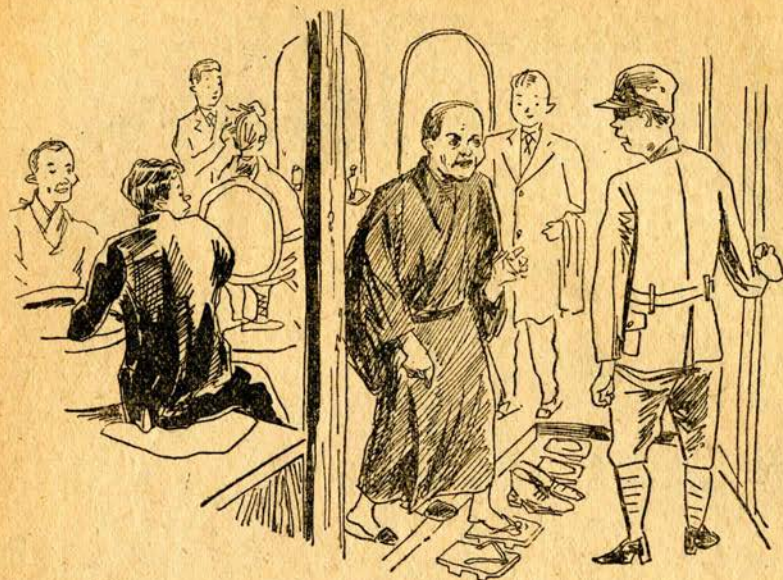
「それがね。」と客は思出しても續にさはると云はぬばかりに椅子の中で姿勢をとり直してゐるが、

「こつちも迂闊だつたんだ。つひほと／＼困じはてゐるところへ、女中がありますがつて云はれ、いきなりとびついちやつた……。そこちや話が出來ないからこつち上つてくれつて、座敷へ通してもてなして、さでどんな都合なのでせうと、何にしても子供の多い上に店にも手がたらないから、大抵の條件ならきくつもりで、きり出した。

と、榎手はいやに落付いて、同じ村から東京のどこかかたい相當の店屋で一つ辛抱して嫁にゆけるまでみつちり奉公したいと、今どきめづらしい心がけの娘で、それに正直で氣のさくい娘だと、斯う云ふんだ。それまでこつちのはり氣になつてしまつた。よくたよとしてみればわかつたんだが、

うちの奴は側からは非たのんでくれと云ふし、年よりだけは流石にかげで注意してゐたが、何に來てさへくれゝばいいんだと、

尙先方の嫁子をきいてみれば、當の娘の母親は長年病床にある。娘が出るについては少しまとまつた金がある。家が一家が安心して娘も出られる。ついてはそこを何とかしてもらへないものかと急に榎手は聲をおとした。それだけのことはきつと働いてかへすとも云ふ。わつて話せば東京へ出る汽車賃にも困つてゐるやうな先方の状態。ではいくら位出してあげればよいのかときけば、四十圓から五十圓あれば、明日にでも、このわたしがきつと連れて來ます。住居はこれ／＼斯う云ふ所で百姓をしてゐると、斯う云ふんだ。それ位のこと働いてかへしてくれゝば何でもない、ようございませう、出ませう。その場で拾圓札を四枚手渡した。札をしまひながらお世辭のつもりで、こちら位の大店で働かしてもらへれ



ば娘も幸せですと歸つて
いつたが、それつきり四
日たつても五日待つても
何の音沙汰もない。まん
まとしてやられてしまつ
た。」

「そいつは災難でした
ね。」と床屋の親爺が云へ
ば側から職人が、

「今度そいつが現はれた
らとつゝかまへてやる。」
と力みかへつてゐた。

横できいてゐた直吉は
これも時局のひつぱくし
たさまにつけ込んでのこ
と、札を握つて路地を出
てから舌を出す男の顔が
見えるやうだ。今日女中
奉公のやうな悪い條件の
元に働く若い女はみな

い。彼女達はどこへいつても更によい働
き口が待つてゐる。斯うした世のさまは彼の
一生を通して二度とおとれることはある
まい、さう思つてその時、立ち上つた客を
鏡の中に見れば、成程ふつくらとした面相
はどこから見ても、かたられる顔に出来て
ゐた。

そこへ最近よくみかけるカーキ色の洋服
を着た客が入つて來、床屋の親爺をつかま
へると、

「どうだい、こつちでは炭がまに合つてゐ
るかい。變に横柄な口をきいた。事變下に
これも町のはやりのやうな顔役、濁つた濁
を更ににごらしてゆく云はよお先き様かつ
ぎ、と、親爺は急にしぶい顔をして、

「どうやらまに合つてゐますよ。」

「さうかね。もしなかつたらわけてやらう
と思つてね。」

それを傍でかたられた男は料金を拂ひな
がらきいてゐて、彼の所では炭のないため

に、女中以上は困つてゐる、きく捨てたらないと俄かに相好をくづして、

「その何でせうか、おたくさまには餘つてゐるやうな炭がおりなものでせうか。」と、うかきを立てた。

「ないこともないが、何しろ承知のやうに東京中の炭屋をさかさまにしてふるひたつても、こゝ炭一つこぼれないこの頃なんだが……。高いですよ。」

「いくら高くても、うちには子供が多いし老人はゐるし、皆體が弱いと來てゐるので金のことなぞ云つてゐられません。」

「さうですか。兎も角斯うしませう。おたくはこの近くでしたね。」と誘ふやうに二人は店を出ていつた。あとを見送つた親爺は「又うまい儲けになつたな。あすこの家をかたつばしからしらべたら、何が出てくるかわかつたもんぢやない。床下から天井裏どこにもない等の品がぎつしりつまつてゐる。」

「ねえ、親爺、これで一つ火事にでもなつたら、この町には相當燃えでのある家が多いですぜ。買ひだめした炭や油が燃え出したらすごいや。」

さう云ふ客の聲をきいて、直吉は燃え上つて消えない町のさまを思ひ浮べてみた。

「おや、田舎へ行つてゐた増田の奥さんが歸つて來ましたね。ひどく慌てゝ電車通りへ走つていつたが、相變らずやり手だな。」

その時店の前を婦人團體の制服をつけた大柄の女が通つた。

「今日は二丁目に戦地から遺骨がかへつて來るんでその出迎へに行くんでせう。」

さう云へばどの軒にも手旗がかへつてあり、既に夕闇は迫つてゐた。二三人の同じ色の女がだらしなくあとを喋りながら追ひかけていつた。

館をあつてもらひながら高軒をかいてゐた客は、突然笑ひ出すと頓狂な聲を上げ、「田舎へ行つてゐたはよかつたね。」と云ひ

「あの女は十日程暗い所へほうり込まれてゐたんだよ。増田がこの前の區會でおちてからと云ふもの、今度こそはと、御亭主のために日頃から町の色々なことに館を出し金をまいてゐる。が、事實は増田が闇取引きであげられたのさ。一家が揃ひも揃つて田舎も田舎、つひにこの先きの警察の極く邊鄙な暗い地下の田舎へ行つてゐたのさ。誰にも生れ故郷へ行つて來たとふれ避してゐる。あの女だけかへされて來たんだ。」

直吉も増田の家を知つてゐた。大抵は事變のために店をつめてゆくが、増田のところは反逆にひろがつていつた。日頃くさいと思ひながらも時節感と見てゐた。

「あゝして大きな館で人なかへ出てゆくとこは相當なものだ。」と誰かと云つた。

遺骨を迎へるラッパの音が近付いて來た。哀切な音は隅々にまで響き渡つた。やがて列の中に白い箱がくつきりと浮かび出した。彼は息苦しい思ひで、心に默禮した。

別時念佛修養會案內

「淨土」會員の篤信の方々が實際に念佛修養をしたいと熱望せられるので、特に左記の通り念佛修養會を催すこととなりましたから、是非萬障御一排御參加下さいますやうおすゝめ致します。

記

一、場所

静岡縣駿東郡御殿場町仁杉大乗寺（富士山麓）
順路 上り列車ハ沼津驛乗替へ。下り列車ハ國府驛乗替へ。御殿場驛下車。乗合バス須走行大乗寺前下車。

前下車。

一、期日

四月十七日午前中集合（大乗寺）
四月十七日午後ヨリ開始、廿一日（日曜）夜終了、四月廿二日朝解散。

（御都合に依り中途より御參加も可）

一、講師

中村辨康先生

一、會費

會費金五圓（但し中途參加の方は一日金壹圓宛）

一、持物

木魚持參のこと。

毛布御持參有らば尙ほよろし。

一、申込

法然上人鑽仰會事務所へ四月十日迄に申込まれたし。

主催 法然上人鑽仰會

別時修養時間割

十七日	十八日	十九日	二十日	廿一日	廿二日
五時半	七時	七時	七時	七時	七時
集合	念佛	念佛	念佛	念佛	念佛
八時	八時	八時	八時	八時	八時
十時	十時	十時	十時	十時	十時
十一時	十一時	十一時	十一時	十一時	十一時
十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時
一時	一時	一時	一時	一時	一時
二時半	二時半	二時半	二時半	二時半	二時半
三時半	三時半	三時半	三時半	三時半	三時半
四時半	四時半	四時半	四時半	四時半	四時半
五時半	五時半	五時半	五時半	五時半	五時半
六時半	六時半	六時半	六時半	六時半	六時半
八時	八時	八時	八時	八時	八時
九時	九時	九時	九時	九時	九時
解散	念佛	念佛	念佛	念佛	念佛
食	食	食	食	食	食
佛	佛	佛	佛	佛	佛
話	話	話	話	話	話
佛	佛	佛	佛	佛	佛
浴	浴	浴	浴	浴	浴
食	食	食	食	食	食
佛	佛	佛	佛	佛	佛
談	談	談	談	談	談



阪根翁のこと

吉田 絃 二 郎

阪根翁の許には絶えずいろいろな人が近づいて来た。

その中には最初から人の善い阪根翁を利用しようといふやうな企てを抱いて来る人もあつた。いつたい阪根翁は事を實行するには強いところがあつたが、人に對しては弱氣であつた。人の相談を無下に斷るといふやうなことはできない人であつた。しかし翁は自然に無礙感應するところがあつたものか、かつて一度も翁を利用しようとして近づいて来た人たちに偽られたことはなかつた。恐らくこれは翁の恬淡無欲の心が淨玻璃のやうに澄んでゐたために、善惡正邪の姿が映つたせいであらう。

×

翁は自分では何も語られなかつたが、翁の事業の跡を考へて見ると、何事を成すにも三分説とでもいふやうな

心構へを持つてをられたやうである。すなはち他人と共に仕事を始めるに、先づ自分の全體の三分の一のものをだし、協力者も三分の一を出し、残る三分の一は時期を待つといふやりかたであつた。だから翁は家政學校を建てるにしても、先づ協力者に適當な人を見出すまでは着手しなかつた。たとへば豫算三萬圓の校舍を建てるとして、翁自身の力で一萬圓を纏めると同時に、相手になるべき人もまた一萬圓の寄進を纏めると同時に、行はならぬ。そして残りの一萬圓は時期に委ねるといふ行き方であつた。こゝに時期に委ねるといふことは、無策で運命を待つといふ意味ではない。三つの中二つ纏まれば、残りの一つは何としても纏まるものであるといふ信念を持つてをられたやうである。ものは完全に達す



れば油断が起る。一部分の不足があれば、人々の心も緊張する。この心の緊張を持ちつづけることによりて時期を待つたのである。

翁は人々と共同して寄進をするに、決して他の人より多額の寄進をするやうなことはなかつた。こゝにも翁のゆかしい人柄がうかがはれる。

第一回の家政学校の寄附金は世話人十五人が銘々五百圓づゝといふことになつた。その時翁は自分の名義としては他と同じやうに五百圓としてつけ出し、さらに御家内、令嬢の名で各々五百圓づゝとして付け出された。これは何時の場合にもさうであつた。

翁はいろいろの人にすゝめて寄進を求められたが、いつも翁の事業の場合には寄進札を建てられたことがなかつた。これも見上げた見識であつた。世間には大きな駒札を建てゝもらひたいために寄進をする人があるやうだが、また寄進者のさうした虚榮心をねらつて駒札を建てるやうな宮寺もあるやうだが、阪根翁は一切寄進者のために駒札を建てることをされなかつた。家政学校の場合も、中には寄進札を建てた方がよいといふやうな考への人もあるらしいが、翁はさういふ説には耳を籍されな

かつた。

家政学校の講堂建築中の話であるが、尾張から京見物に出て来た人があつた。この人は大島徹水上人の御郷里の人で、上人を學校に訪ねて見えたのであつた。ところがこの人は上人から阪根翁のことを承つて、即座に十幾圓の金を學校建築費の一部分にといつて寄進してしまつた。

「わたくしはこの金を持つて、京極に行き、故郷の子供達への京みやげを買つてもどるつもりでありましたが：」と言つたので上人は「それではみやげを買ふ金があるまい」とたづねられた。

「いえ、阪根さんのお話こそこの上もない何よりの京みやげでございます。わたくしは子供達にまことに結構なおみやげをいただきました」と欣然として故郷に歸つて行つた。

翁の隠れた回向といふものもまことにありがたい心かげであつた。

翁は知つた人の計を聽けば佛壇にその人の俗名をかゝ



げて七日くらゐは拜んでをられた。

またかつて一度の面識もない人でも、その人が國家のために盡した人であれば、經本に名を書いて回向をしてをられた。伊藤博文公がハルビンに亡くなられた場合は翁は回向をしてをられた。

また自分の家にかつてゐた召使や車夫のやうな人の亡くなつたことを聞いたをりにもちやんと拜んでをられた。また新聞記事などで見ると非業の最期を遂げた未知無縁の人のためにも必ず拜んでをられた。

それから翁の回向といふものはまことに丁寧なものでこれなども一般の人々にとつてよい教訓であらうと思はれる。

先づ詳月命日の佛を拜み、それから阿彌陀さま、お釋迦さま、次に御先祖といふ順に總回向をしてをられた。

年回の配り物にしても必ず佛さまに關するものを配つてをられた。世間的に菓子などの配り物をされるが、同時に過去帳引醫、お坊さまには袈裟といふやうな物を贈つてをられた。

阪根翁の家を訪ねて行つた人は、歸りには自分の下駄

が綺麗になつてゐるのに氣付いたであらう。お客が座敷に通されてゐる間に、下駄の土が淨められてゐるのであつた。

かういふ主人のこまやかな心づかひは、いつとはなしに下々の奉公人にまで及んで、上人達が阪根翁を訪ねられると、召使たちはちやんと心得て精進料理を調へ、まめし／＼立ち倒れて、かつて客人に對して不快な思ひなどをさせたことはなかつた。

翁はまた商賣の上からはいつもお客さまを大切にし、何事もお客さま本位であつた。常に店員を戒めて「物を賣るには先方さまの御都合のよろしいやうにして上げねばならぬ。自分の方の勝手考へてはならぬ」と言つてをられた。

家の奉公人たちも心から翁には敬服してゐて、かつて蔭口一つ利いたものもなかつた。みんなが「おちいさんおちいさん」と申して、親しみ、尊敬してゐた。世間には社會的には評判のよい人でも家の者、殊に家の召使ひなどには氣受けるよくない人もすいぶんあるが、阪根翁は奉公人の末に至るまで親しまれてゐた。



以上阪根翁の物語も十回を以てこゝに一と先づ筆を揃くことに致します。この間一年餘にわたり、大島合下には御老體にもかゝはらず毎月一日、わたくしの亡妻の命日の夜には東京郊外の玉川の茅屋をお訪ね下され、御丁重な御回向を賜はりました。雨風のひどい日もあり、雪の日もつゞきました。上人には北海道や東北の長途の御旅行を終へさせられ、朝上野にお着きになり、明日は京都へお立ちになるといふやうなひどく御疲勞のところを必ず駕を枉げられて御回向をお勤め下されました。お齋を參らすといつても、裏の竹山の竹の子か、裏の畑の里芋をお上げいたす程度のものに過ぎません。上人はお越しになると先づ阪根翁の御話をして下されました。それから回向になり、最後に貧しいお齋をさし上げる段になるのですが、夜更けてお歸りになる老師のお姿を、雪の中、冴えかへる霜夜の星空の下に拜んだことも幾度かありました。

生憎わたくしの家の玄関から門までの間が比較的遠くそれに椎や竹や椿が路次を埋める程に繁つてゐますので雨雪の夜などいつも上人の御法衣は濡れてしまひました。それにつけても上人の阪根翁にお盡しになる御心を察し

ては、世にもありがたいかぎりであります。以上はやうな次第で、わたくしは阪根翁について今まで筆をつゞけましたが、阪根翁のやうな信仰の厚い、また世にも稀なる有徳の方を知つたといふことは、お互にまことにありがたい佛縁であると思ひます。

(をはり)

係より

昨年より前後十回に渡つて本誌に連載され、全國の讀者より感謝の言葉を貰いた吉田絃二郎先生の「阪根翁のこと」もこれを以て完結となりました。

まことに世にも稀れた妙好人阪根翁兵衛翁のお人格は吉田先生の麗筆によつて見事に描かれ、讀む者の心をうたずにはおきませんでした。然し、このうらはしい一篇が出来上つたのも、大島徹水大僧正と吉田絃二郎先生との間に結ばれた深くゆかしい佛縁のたまものであります。近く何らかの形でこの一篇が一冊の畫物として世に出ることになつております。

大島大僧正と吉田先生に深い感謝を捧げずにはおられませぬ。(編輯部)

人 所 時

佛陀在世の頃
祇園精舎とその近所
佛 陀
合 利 弗
目 連
阿 難
サンカタヤー

その弟子
同
佛敎信者



曲 戲

祇園精舎の戀

須 磨 一 郎
齋 藤 清 畫

第二幕（一場）

ウエーサ
チンチャー
ジャヌウエーダ
同
バラモンの女
その師
A
B
C
其の他佛敎信者多勢
その弟子

祇園精舎内部 幕開くと、佛陀の説敎最中。
兩脇に、舍利弗、目連、阿難等の太弟子靜かに聴き入つてゐる。サンカタヤー、ウエーサ、其の他の信者達、片膝を地につき、合掌し、形の如く傾聴してゐる。ウエーサは、やゝ不安な面持。サンカタヤーは時々、説敎中の

佛陀の方へ鋭い視線を送る。櫻殿せんとする不満を掩へてゐる様子。他の信者は敬虔な面持。信者席は看客席に廻り、觀客をも、聴衆の一部分と看なす。花道に近い方には、ジャヌウエーダの弟子、B、C、坐つて居り、花道の方を、しきりに氣にしながら二人で、さゝやき合つてゐる。

B「もう、來さうなものだかな」

C「馬鹿に手間取る様ではないか。どうも最近、チンチャーの態度が、おかしいやうに思はれてならぬ。お身は、どう思ふ？」

B「いや、大丈夫だらう。チンチャーに限つて……。あれは、氣の強い女だからな」
C「うむ。今更、憶したでもあるまいが……」

しかし、氣になる」

B「何が？ こゝまで、やつたのだから、今更憶するわけもなからうではないか？ それともお身は、チンチャーが我々を裏切るとでも、思はれるのかな？」

O「いや。しかし……」

B「まさかの時は、之じやよ！」

B、懐へ手を入れて、匕首の柄を、Oに見せる。O、重くうなづく。舞臺中央では佛陀の説教が続いてゐる。佛陀は丁度、菩薩の戒律を説いてゐる所で、殺生戒を説き終り第二の盜戒に入つてゐる。

佛「佛子もし自ら盜み、人をして盜ましめ又は方便し、謀めたゞえる等によつて盜むならば、そは盜の因、盜の業等となる」

サンカタヤー、一寸、肩をそびやかして、鼻の先で嘲笑ふ。ヴェーサ、慌てゝ、その袖を引いて注意する。サンカタヤー、荒々しくその袖を引き拂ふ。佛陀の眼は注意深く、サンカタヤーの面上に注がれる。舍利弗もそれに氣付いた様に、二人の方を見、靜かに、佛

陀を見上げ立たうとする。佛陀、眼で、輕く押へる。O、膝をついたまゝ、後ろの方を伸び上つて見る。

O「あゝ、來た、來た」

Bも振返る。花道より、チンチャーとAと現はる。

A「チンチャー殿。氣おくれせぬ様、しつかりとやつて貰はねば困る」

チンチャー、淋しさに微笑して、うなづく。

A「大丈夫かの？ どうも、近頃、お身の様子がおかしい。ほんとに、大丈夫かの？」

チ「大丈夫です。」(きつぱりと云ふ)

A「それで安心した。では私が、丁度好いと思ふた所で合圖をする程に、その時を外さずにお願ひしますぞ」

チンチャー、うなづく。この會話の中に、佛陀の説教は、盜戒の終りに近づく。チンチャー、A、舞臺について禮拜して坐る。A、B、Oとうなづき合ふ。チンチャーは、うなだれて、聽いてゐる。

佛「然るに、却つて人の財物を盜むならば是れ菩薩の斷頭罪である。次に、私は、煙戒について述べねばならぬ」

A、B、O、肘でつき合つて緊張の面持。サンカタヤー、きつとなつて顔を上げる。

佛「佛子もし自ら煙し、人をして煙せしめるならば、煙の因、業等となる」

サ「蕪！」(大聲で叫んで立ち上らうとする。ヴェーサ、引止めようとする) いや、ヴェーサ、離してくれ。僞善者め！」

舍利弗、靜かに立ち上る。佛陀、言葉を切つて、黙つて見てゐる。

舍「靜かになさい。無禮が過ぎませう」

信者、口々に叫ぶ「誰だ、御法話を妨げるのは？」退場しろと言ふことが、あれば、後で言へや」

舍利弗、兩手を前へ差し伸べて、騒ぎ立たんとする聽衆を押へる。

舍「靜靜に、靜靜に！勝手な發言を禁じます。それに背く方には、退場を命じます！」

信者達、靜肅になる。サンカタヤーも、い

や／＼ながら、坐る。舍利弗、座の靜慮になるのを見届けてから、佛陀を仰ぎ見、一寸、うなづき合つて坐る。

佛「乃至、あらゆる婦人を犯してはならぬ」
サンカタヤー、再び、何事かを叫び出さんとする。舍利弗、鋭く、その方を見る。サンカタヤー、黙る。

佛「道ならぬ婦人においては尙更である。」

A（低聲に）「自分だけは例外らしいな」

B「佛は何をしても、いゝのさ」

A、O、くつ／＼と、含み笑ひをする。近く

の信者二、三人、不思議さうに振返る。

佛「菩薩は常に孝順の心を起して人々を救

ひ、淨い道を興へねばならぬ。然るに却つて

道ならぬ婦人を行ふならば、是れ菩薩の斷頭罪である」

サンカタヤー、奮然として立ち上る。

サ「偽善者め！その手で、女をたぶらかし

やがるのだ。」

信者一「黙れ！黙らないか」

信者二「佛を誹謗すると、そのまゝには置

かぬぞー」

サ「何？」

そのまゝには置かぬ？（たけり

たつて）おゝ、何とでも、するがいい。明目

目！佛は、奴が、女を孕ましたのを、ちゃん

と知つてゐるのだ！」

信者三「薙まだ云ふか！？」

一座、騒然とする。舍利弗、目連、立つて

制止せんとするが、仲々、靜まらない。

A「今だ！チンチャヤー！」

チンチャヤー、蒼白になつた顔を振り上げ、

Aの顔を見、騒然たる聽衆を見、唇をかみ、

困惑の表情。

A「どうしたのだ、チンチャヤー！？」

チンチャヤー、意を決して立ち上る。

チ「出家よ！」

サンカタヤー、聲の力を振り返つて、燃え

る眼をチンチャヤーに注ぐ。信者達も、この新

らしい發言者に注意を引かれ、しんとする。

チ「お身は、大法を人々に説いてゐられる。

しかし、佛が故に、私の爲に、産屋を作ら

ないのか？ お身には、大きな施主が澤山あ

るではないか？ 快樂を充分に食つて置きな

がら、何故、その結果を恐れ給ふのか？」

信者達、愕然として、チンチャヤーと佛陀の

顔を見比べる。佛陀、靜かに微笑をたゞへて

チンチャヤーの顔を見てゐる。舍利弗、じつと

A、B、の方を見て、目連の顔を見る。目連

うなづいて、信者達をわけて、近づかうとす

るチンチャヤーの方へ行かうとするのだと思つ

たサンカタヤーが行手に立ちふさがりながら

叫ぶ。サ「立派な佛様だ！」

A、B、Cと、その附近にゐた信者達、ど

つと、笑ふ。他の信者達、困惑して、さゝや

き交す。

信者一「ほんとかしら」

信者二「どうも、さうらしいね」

信者三「佛様だなんて當てにならないもん

だね」

同四「無理もないさ、あんな美人じやあね」

熱心な信者らしいのが、段々、空氣が不穩

になつて行くのに堪えかねて叫ぶ。

「世尊よ！我々に満足行く様な答へを與

へて下さい」

サ「答へられるもんか！」

A「何處で樂しんだか位は言へるさー」

どつと笑ふ。始めの時より、笑ひに參加する人間が多くなる。チンチャ一の顔色は益々蒼白になり、腫の起伏が劇しくなる。眼を外せようとするが、佛陀の視線に捕へられて、眼を外せることが出来ない。チンチャ一の苦惱の色と、佛陀の慈悲の眼とが、著るしい對象を作つて見合つてゐる。この、眞鍮な色が、聴衆から、喧騒を除き去る。一種、嚴肅な空氣が流れ始める。サンカターヤも訝しさに兩者を見つめる。チンチャ一の苦惱の色が哀願に變る。

佛「妹よ（靜かに呼びかける）

チ「世尊！！（よるめく様に前に、二三步、泳ぎ出る）

A「おゝー裏切だ！！」

A、短刀を、抜きはなつ。目連、サンカターヤを突きのけて奮然と進む。だが



短刀は既に、チンチャ一の横腹に突きささつてゐる。A、B、C共に、外へ走り出る。目連、追つて出る。聴衆、餘りの事に呆然としてゐる。阿難、チンチャ一に走り寄り、抱き起す。

阿「女よ！氣を確かに！」

チンチャ一、意識を回復すると、短刀の脇に切られた腹帯の下から、大きい盆を引きずり出し、阿難の肩に縋りつゝ、立ち上る。その盆を高く差し上げて、聴衆に見せる。皆々、了解した様な面持ちでうなづく。チンチャ一、嬉しさに微笑むと、がつくりと、ずり落ちる。阿難、膝の上で交える。佛陀、靜かに歩み寄る。

佛「妹よ！」

チンチャ一、微かに眼を開き、合掌する。佛陀も合掌。一同肅然として合掌。

只、サンカターヤのすゝり泣きの聲のみ段々高くなる。

その中に、靜かに暮——



天津の

女性

山田 昇善

大竹美智子さん——は天津××會社事務自
宅の女中さん。十八で土地の新隘へ短歌を授
じたりしてゐる人だつたが昨年の正月も終り
の十五日の朝といつても七時前別院へ来て二
階の部屋の戸を叩き

「御免下さい、御免下さい」

丁度本堂脇の部屋に中野君が寝てゐて眼を
醒まし出て見ると見知らぬ娘さんが一人

「あのお念佛が申させて欲しいのです」

中野君はそのまゝ下の私の部屋へ来て、お
人だよ、といふ。その頃毎朝七時から念佛を申
してゐた私はその朝も法衣を纏つてゐたとこ
ろだつたが、えゝ今すぐと答へて本堂へ上つ
た。八時迄の念佛である。真暗な大陸の夜明

前の寒さがひしひしと身に沁みる。佛前に揺
らぐローソクの黄色い焰に如來様の温容端整
の相好が拜される。ボクボクボク、私の木魚
と大竹さんのと同一の時もあり相互に入混る
ときもある。ほのほのと夜が明ける迄心から
の稱名念佛であつた。

「如來様とあなたとが結びつくのです、どん
な時でも護つてゐて下さる如來様へあなたの
身も心もお任せする氣持で木魚を叩き稱名す
るのです。いつでもあなたの好きな時來て自
由に念佛申しなさい」

念佛する時の心構えを問はれて私は率直に
これだけ答へると、朝の用事がありますから
と言つて大竹さんは歸つて行つた。

征旅の
回想

(四) 安田 秀賢

兵馬 征戰

十一月九日、未明過ぎ赤十字從軍看護婦
諸氏の歡送裡に上陸を敢行して以來、一年
九ヶ月、眞如無電臺での敵機空襲を緒戦と
して、兵馬征戰の難行動は、戦士ならでは
味得出来ないことであらう。

今にして曉の夜明けの夢の中に思ひ出
されるのは、福井市内出身、小倉軍醫廠の
ことである。南京戦も終了して、部隊は同
地に警備の間、各地の敵軍根據地の討伐戦
に出動する毎に、小倉軍醫廠とは行を共に
した。

あの夢のやうな上海、蘇州、南京の間
大小無數のクリークの中を、船に乗つて進
む時、いつも小倉軍醫廠は、私に佛教のお
話を求められた。佛教有縁の地の越前の人
なれば至極最のこと乍らいつも二人で法

ボクボクボク……

それから夜明け頃或は自分の都合のいい時に大竹さんは本堂で念佛を申しした。

「父や母や一人の娘を残してこちらへ来てゐますといろいろの場合に故郷の人を想ひ自分が頼無くなりますので……」

そう言つてお寺へ参り初めてから何處かしら暗い寂しさの影の見える大竹さんは、次第に明るく元氣になつた。

「いままで家の仕事にも嫌な氣持でする事が多かつたのですがこの頃では以前氣になつた他人の言葉、叱られたり注意されたり——が有難く聞けるやうになりました。何か自分を本當に知つてゐて下さるお方——如來様ですか、——がいつも私を抱いてゐて下さるやうな安心で毎日が明るく愉しくなりました」生れ變つた様な明るさの大竹さんはそんな事を語つた。

六月の下旬内地へ歸る迄務めの身を暇を見ては本堂で稱名を續けて別時など缺かさなかつた。水災後小包みと見舞狀を郷里から送つ

てくれた。お念佛は忘れませんと言つて寄こした。

× × ×

三上美恵子さん——まだ土曜講演の參證が難える程しかなかつた時租界の隅から車にも乗らず朝詣り、別時などの法要には必らず參詣し假令に稱名念佛した人である。短歌を詠み素直な心で歌を新聞にのせてゐた。

兄さんの家に寄宿し病院へ勤め白衣の勇士の世話をして誠心こめて奉仕してゐたが、

「心の念珠を忘れません」

軍醫として活躍する留守がちの兄の家、義姉さんは病氣で床に就いたなり。五つ三つ一つといふ三人の子の母代りもしなければならぬ三上さんは念佛申し出してからいつもそう言つてゐた。

義姉さんが死んでからは三人の子供と兄の留守をしつかと受持ち辱れを見ては幼い子供を抱いてお寺へ来て念佛する三上さんの姿は、到底他の誰れでもが出来る業ではない。そしてそれが明るく愉しそなのである。

然し上人の念佛を中心にお話をした。

深更、小部落に露宿の折、銃の音、夜襲を引きしまつた感情の波の中に、ジツト私を見つめて下さつたあの鳩のやうな瞳を今に忘れることが出来ぬ。そして國に残された

お花見統制

山崎 善一

「今年のお花見はお宅ですることにしましたのよ」



「結婚には失敗しましたけれど、そのために私は如来様のみ心に救はれました」

しみんとそんな言葉の言へる様になつた三上さんだつた。

未曾有の水災で北京へ移住したが天津へ来ると必ず別院を訪れるといふ事を或る事情で別院を出た私は今年になつて聞いた。

「長谷川さんの若嫁さんが大變です！」

別院の朝詣り僧者の中の人々が急に悪くなつたといふ電話で取るものもと合はず馳けつけて見た。脚氣から心臓を悪くし加へて神經痛である長谷川晴さんはお母さんに抱かれて苦しんでゐた。二人目の醫者が来て注射をして歸つた。併し病人は息が詰まると苦しむのである。

長谷川さん母娘は大阪にゐた時からの念佛者である。天津へ来ても別院のお詣りは二人揃つて缺かした事がない。本當に仲の良い姑家である。

「お母さん、おかあさん！」

殆んど苦しさのため夢中になつてゐるお晴さんはそう言つて母の手を探す。こゝにあるえ、ちやんとこゝに……と言ひながらお婆さんの聲は涙聲だつた。以前から悪かつた脚氣が癒したといふ醫者の診断で、發作はその日の夜明けに起り醫師の來たのが八時過ぎ、手遅れだつた。始めの醫者は匙を投げたか二度目の電話で行けぬと言つて來た。もう駄目だすわ……と告げるお婆さんの心を察するとホロリとする。御主人は離用で新京へ行き明日歸るといふ。私は親戚の出來事の様になが痛んだ。

枕許には學生時代、新婚當時より現在までの寫眞のアルバムが置いてある。故郷の母や夫の名もいわず唯母さん、と姑の手を探すお晴さんに心打たれたが更に愕かされたのは、

「着物、お母さん着物！」
苦しさの中から告げるその着物といふのが大阪の五重相傳で授かつた經帷子であると聞かされたことで

「着物も帯も念珠も揃えてゐるえ、心配しな

奥さんのことなど、シミジミ語られしことア、その小倉軍醫も今は尊き國のみ柱なるを思ひて、千萬無量の感慨のみ。

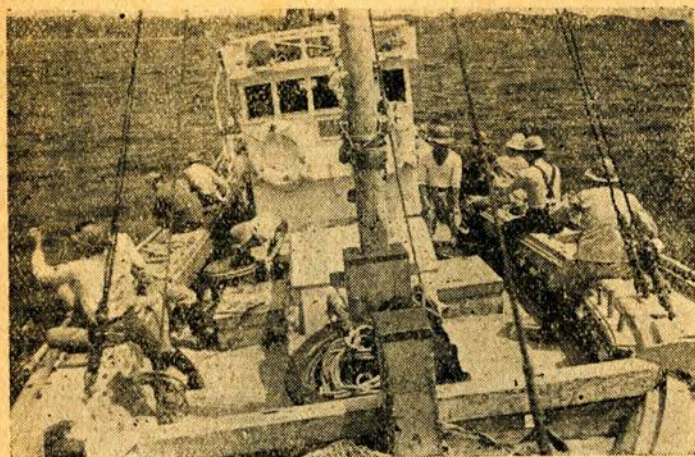
いよいよ武漢三鎮へ出軍の前日、恩師、桑門勳學への追慕の遺言狀一通、家族への遺言狀一通、その文に曰く、

戦死の公報いたれば、公葬後、直ちに京都別宅に退散すべし。一日も寺院に止るべからず。と

漢口敵主力八十萬、何ぞ生還を期せん哉、今にして思ふ、偉大なる夢なりしことを、人生、社會、文化、宗教、ア、あの征戰の最中には大なる疑問であつた。

これは銃砲彈に身をおいた人の深い感懷であらうと思ふ。

歴史は後人の記録せる時代の動きを細大漏らさず執筆せるものである。然し、その歴史を作る人の眞の感情は到底これを捕捉することは出来ぬ。その生前に現はせる文書、それは平素の精神狀態における文書で



出漁

白木俊二郎

や、もうぢき樂になるえ」とお婆さんが言ふ
と
「枕許へ……」

と安心した様にいふお晴さんだつた。

生死の間隙と云ふに少しも取亂した様子も
二人の間に見られない。そういふ只ならぬ感
情の動きの中にも深く強い静寂さが感じられ
た。平素の信仰の現れであつた。

死の床で經帷子を要求し、静かに心の中で
念佛を唱えたお晴さんは現在病氣もよくなり
昔日の如く母娘して別院へ詣つてゐる。二人
とも壯健である。

× × ×
渡支天津の明け暮れを早二年目の春を迎え
て市井の茅屋に住む秘の脚にかつての心の友
の姿が懐しく去來する。その二、三を述べて
孤心懷溫の素志を遂ぐ。

静かなる想ひ

○白き雲西へゆく雲ゆるやかに

動くを見れば悲しかりけり

○家人に心なづまずこの家を

いでむと思ふ吾が心はも

○ふるさとの池の水邊に咲きしてふ

その花みたき霧の夜半かな

(筆名は知恩院大津別院在僧)

ある。あの兵馬征戰の白兵戰、文なく言な
く戰と死である。戰爭終りての感想談はこ
れ遂に一つの追想に過ぎないではないか。
私は武運に恵まれて歸還することが出来
た。そして歸還の人々の物語は、海の如く
山の如くある。そして發表もある。

私は思ふ、又、かく信ずる。
言語に言へず、文に書けず、感情に現せ
ず。

噫、空に雲が流れてゐる。あの雲を見て
獨り涙がにじむ。

この氣持、これ征旅の回想のみ (終)

淨き友の會 信仰坐談會案内

一、日時 四月十四日午後七時(第二日曜)

同 廿八日午後七時(第四日曜)

一、會場 東京本郷東片町七八橋本方

電話小石川四九七六番

一、講師 中村辨康先生

一、議題 一紙小消息講義

淨き友の會幹事

小 説

尼^{あま}

と

地^ち

藏^{ざう}



お經文によりますと、お地藏さまはこの世から八萬由旬も高い須彌山の頂きの忉利天といふところにお暮しになつてゐまして、お釋迦さまのお云ひつけをよく守り、毎朝恆沙の禪定にお入りになつては六道

の衆生を教化なさるありがたい大悲の菩薩だといふことでございます。忉利天と云へばあの帝釋さまのいらつしやるところです。六道とは申すまでもなく地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人のことであ

佐賀 一海
鈴木 金平 畫

ります。そして、お地藏さまといふお名は、安忍不動なること大地の如く、靜慮深密なること秘藏の如くなれば、云々のいはれもついてをります次第です。

さてこのお地藏さまは、その最り知れないお情け深いお姿を、たゞ天竺の遠い國にだけ毎朝あらはすのではなく、この世の至るところにまでお見ゆけ申すことの出来るといふ噂がひろまつたのでございませう。その頃、丹波の國でかうした噂をひろめた張本人は、蓮知尼といふ古ぼけた庵寺の年老いた無學の尼でありました。尼は村の人々にお地藏さまのたふとさを説きまはるのが唯一の日課でありましたが、しかし自分自身まだ現身のお地藏さまに會ふ機會の恵まれずにゐることが、誰びとにも告げ得ない悲しみなのでございしました。お地藏さまは毎朝早く、近郷近在のどこかをお歩きになつてゐる、そのおかげで皆の衆も安穩に暮せるのだ、かうした話は口の酢くなるほど繰返してゐるのですが、さてお地藏さまをその自分がひと目ほんとに拜んだのでなければどうせうわけもないのです。尼は夜中から曉方にかけて、日によつて所を更へてはお地藏さまのお姿を夢中になつて探し歩いてをりました。

ところが或晩のことでございます。尼はいつものとほり夜更けてから寺を出たのでありますが、途で驛面のきたない格好をした大男に出逢ひました。その男はならず者の阿太郎といふ在で知らぬ人となゐり厄介者でした。いまでも博打で文無しになつての歸りでせう、眼ばかり

りぎよろつかせながら月影をひろひ歩きしてゐましたが、向ふから來るのが蓮知尼だと分ると、少しがつかりした様子で聲をかけました。

「庵主さんはいまごろどこへお出かけかね。」

尼は相手が阿太郎だとわかつてても平氣で、

「さがしものだよ。」

かう云ひすてゝ通り過ぎやうとしましたが、阿太郎は急に尼の前に立ちふさがるやうにして避がりました。

「何のさがしものかね。」

「お地藏さまさ。勿體ないことだがお地藏さまはこの近所のどこかにお出でになるからね。」

「地藏？」

阿太郎は呆つ氣にとられた様子で、暫く尼の顔を眺めてゐましたが、うん、とひとり鎖くと、にやにやしながら、

「地藏なら知つてゐるよ。あるところをちやんと心得てゐるさあね。教へて進せようか。」と云ひました。尼はびつくりした風で、

「ほんとなら教へよ、後生ぢや。」と眼を輝かせながらせきこむやうに訊きました。

「だがね、教へたらどうするね？」

「御禮は何とでもする。」

「では、おまへさんの衣類を著くるみ渡してもらひたい。それが厭なら地藏のところへ連れてはゆかれぬ。」

「あゝいゝとも。いゝとも。」

尼は二つ返事で答へると、早速身につけたものをぬぎにかゝりました。そして襦袢一枚になると、

「うれしや、うれしや、これで本願成就ができるとは。」

とよろこびました。

阿太郎は尼の衣類を小脇に挟み、もと来た道のはうへ歩きだしました。尼は手を振り振り、自分がどんな奇妙な格好になつたかも知らないやうに、勇み立つて阿太郎のあとに従ひました。ところで、阿太郎

は暫く纏つと歩調を緩めて尼と肩をならべながら、

「念を押すが、わしの知つてゐる地蔵は子供だが、それでいゝね？」

と言葉をかけました。尼はすぐさま合點して、

「子供で結構。お地藏さまは時によつては怖ろしい鬼の姿へお借りになるもの。」と答へました。阿太郎はちよつとへんな顔をしました。勿論尼に氣づかうはずはありません。彼はつづ

けて、

「すると地蔵は若いきれいなむすめにもなるかね。」と訊きました。

「あゝ、若い女の憐みをお救ひなさるときには女人の姿に化すのだらうよ。」

彼はそつぽを向いて舌を出しました。「この尼さんは噂どほりによつぽど人がいゝと見える。あの漢たらし地蔵を見たらどんな氣になるか、確かに見ものだ。」こんなことを思ひながら、彼は尼を導いて行きました。彼の目指すところは隣村のはづれにある石工の家でありまし

た。ところで、ふしぎなことには、いつもなら月の光の下で鼻

唄まじりのぶらぶら歩きをして

もほんの僅かの間に行きつたであらうに、いまに限つて隣村

への道程が大へん手間どれるのでありました。いや、隣村へは

やつとのことで通りついたのでしたが、今度は石工の家がなか

なに見つかりません。こんな筈

はないと、阿太郎は何べんも眼をこすつてみましたが、氣ばかり焦つてその家があらはれて来



ないのです。それに彼の足はまるで鈍でもつけてゐるやうに重くなつて來ました。一番鶏が鳴きました。いよいよ彼は氣が氣ではありません。しかし尼はと見ると、これは襦袢一つの寒さも感じぬ風で、いそいそと彼に従ふばかりでありました。困つた、困つた。」と口に出さないだけで、阿太郎は生れてからまだ経験したこともない弱り方をいたしました。

さて、森かげの水車小屋の傍らの一軒家の前に來たとき、

「こゝだらう、こゝだらう。」と尼が突然聲を張りあげました。阿太郎はぎくりとして立ち止まりました。尼の指す家が自分の目的としたところだつたではありませんか。いつたい今まで自分は何を呆けてゐたのだ。殊によつたら貉に化かされたのかもしれない、然しそれにしても連れの尼はどうしてそれと分つたのか、彼は少し氣味わるい感じがして、暫くは一語も發せませんでした。が、やがて彼は氣を取直すと、づかづかと家の戸口に立ちふさがつて怒鳴りました。



はまだ寝てゐるよ。」

また何の無心にも來たのだらうか、とかみさんはびくびくしはじめました。すると、彼はほつとしたやうに、

「濟まんが地藏坊を起してくれよ。庵主さんが用があるんだ。」と頼みこみました。

「庵主さんがけ？」かみさんは怪訝な顔で阿太郎を見ましたが、眼を反らすと成程尼が立つてゐます。しかも奇妙な格好です。が、尼が一緒なら災ひもかゝるまいと氣を取直して再び家の中に引つこみまし

「地藏はゐるか、地藏はゐるか、阿太郎が來たのだ。」

三度繰返したとき、入口の戸をぎこぎこ取はづしながら、

「誰で？ もう夜が明けたんかい？」

だらしなく肥つたかみさんが眠さうな顔を出了ました。

「この地藏に用があるんだ。」かう云ふ庵の主が阿太郎だと

知ると、かみさんは急に眼の覺めた思ひで言葉を和げました。

「あ、あなたさまかい。地藏



た。ところが、ものゝ二分と経たぬうちに、かみさんはおろおろ膝で喚きながら外にとび出して來ました。

「へんだよ、へんだよ、地藏があるない、さつきまで一緒にねてゐたのに。どこをさがしても見つからない……」

阿太郎は土足のまんま、家の中に入つて行きました。しかしこれも間もなく引返して來ますと、

「嘘ぢやないらしい。」

さう吐き出すやうに云つて、その切株に腰を据ゑてしまひました。

「うちは遠くへ仕事に行つたきりだよ。地藏坊があるなくなつたらどうしよう。誰があの子を連れてつたのだよ？ なせまた庵主さんは今時分何の用であの子を呼びに來なすつた？」

かみさんは家のまはりをうろろしながら喚きつづけました。

尼はこの時、眼を瞑つたままで一心に祈つてゐる様子でしたが、やがて靜かに口をきりました。

「おかみさんの心配はいらないよ。お地藏さまはすぐ戻らつしやる。」

「お地藏さま？」かみさんは尼の言葉を咎めてすぐ喰つてかゝりました。「佛のことなどわたしに何のかゝりがあるかよ、うちの地藏を返してもらひたいよ。あゝ、あゝ……」

尼は返事のかはりに微笑しました。

「さうだ、地藏を捜し出さなきや話にならない。」

切株の阿太郎は起ちあがると、眼のいろの變つてあるかみさんについて、裏手の林に入つて行きました。それからどのくらぬ時刻がすぎたでせう、ほのぼのと白い朝の影が、櫛かはらず眼を瞬つて南無地藏菩薩を祈りつけてゐる尼の近くにも忍び寄つて來ました。

と、突然、尼の頭が何かで激しく叩かれました。眼をひらくと、十ばかりの男の子が細竹杖を右手でぐる／＼廻しながらにこ／＼顔で立つてゐます。

はつとして、尼は、

「お地藏さまか、お地藏さまか。」

と合せた手を高く差しあげました。

「あゝ地藏だい。」

子供の返事とともに、もう尼は地に轉び伏してしまひました。

がた／＼ね飽ぐんだ末、家の前で子供の姿を見つけると、かみさんはいきなり袂の襟巻を掴んで怒鳴りつけました。

「どこへ行つてたよ、この馬鹿者！」

「あつちの鯉へ杖をとりに行つた。」

「遊びなら晝間しろ。親に心配かけてどうする氣か。」

「うゝん、もう朝だ。」

子供は泣きさうな顔になりました。かみさんは拳固を振りあげよう

として、ふと子供の足もとの尼に氣づきました。そして聲の調子を更へると、子供に訊きました。

「庵主さんは何をしてる？」

「知らない。」

「何か云つたか？」

「名まへを云つたから、さうだと云つたよ。そしたらあゝしてるんだよ。」

子供は尼の頭を杖で敲いたことは白狀しませんでした。かみさんは「名まへ、地藏、地藏さま。」

とひとり言を呟いてみましたが、それと思ひ當るとあわてゝ子供を抱きよせ、

「大へんだぞよ。おまへを佛にしまふにな。」

と子供の耳に小聲でしかせながら、家の中に駆けこみました。……阿太郎の姿はありませんでした。

が、いつの間にかさうしたのか、ゆふべ彼が尼からせがみ取つたあの衣類は、尼の背中にかけてありました。

小鳥の美しい囀りが聴えはじめました。それよりも、もつと透つて美しい謠文の聲がたゞひとり地に伏した遊知尼の唇から流れて來る、のでございます。

「歸命頂禮、南無大悲地藏菩薩……」

大野法道・中村辨康・前田聽瑞三師 共 著 法然上人鑽仰會發行

淨土宗讀本

菊版四五〇頁・總タロース装
本文五號バラルビ付
挿繪十數葉入り
定價 二圓五十錢
送料 二十二錢
(本會の會員に限り特に一割引の三)
(圖二十五錢にてお頒ち致します)

著者の言葉

大野法道

皇國日本人の精神生活の養ひとして、過去に於て力ある實績を示したわが淨土の教へを、現在から將來へかけて、一層強く廣く傳へる使命をもつ本を書かうとして、まづ私の心に去來したことは、この教へのことぞといふ所を開顯せねばならぬが、人間の眞實のいのちに徹到せられた法然上人の信仰の調りしられぬ深さと廣さは、たやす

『淨土宗讀本』の發刊を待つ

醫學博士 和田正系

「淨土宗讀本」の發刊がいよいよ間近に迫りました由、私は一日も速に二本を購つて拜見出来る日を楽しみにして居る者であります。思へば私はこのやうな書物を長い間探し求めてゐたのであります。それですからこの本の出版計畫が廣告に出ました時には、思はず「われ待つこと久し矣」ともろ手を擧げ

て叫びたい氣が致したのであります。その待望の書物がいよいよ近く出るといふことで、どういふ體裁で、そしてどんな装釘かと、そんな事までが楽しく待たれるのであります。自然科學といふものばかりを唯一の金城湯池と心得て、醫學を唯物的にのみ考へて居た私の思想や生活が、脆くも破れ果て、人生

くそれが成しえられぬといふたじろぎの憾みであつた。しかしいざ着手といふ場合に於ては、清朗の一心に立ち歸り、自信の感激に打ちまかせ、舊來の型を離れずにゆるやかに湧き上る心のまゝに筆を執ることができたのを喜んで居ります。

中村辨康

佛教渡來以來少くとも藤原末期に到るまでは、支那よりの傳統をのみ重んじて、新しい宗教の出現を許さなかつた。天台眞言の二宗にしても支那のとは全く違つて居りながら、尙ほ且つ支那よりの將來物たることを誇つて居たのである。然かも其の傳播は多く上層のみに限られ一般民衆はその教義を知るに由なく其宗教の中に入るには少なからぬ素養と財物とを要したのである。

然るに時代は鎌倉時代をかもしだす程の一大變革期となつて、思想及び宗教の上に全く異つたものを要望し、遂に純日本産の

の、そして人間の生命といふものの本當の姿がおぼろ氣ながらも現れかけて來た時、何にも増して私の光明であり刺戟であり慰めでもあつたものは佛の教へでありました。私は貪るやうに佛書を探めて讀み散らしました。未だ智慧淺く、經藏の乏しい者には、深遠なる賢者の教へは、勿論理解出来ませんでした。然し私は細々とした一條の光りを頼りにして何とかして釋教の遺教である、この東洋の智慧の根源を知りたいと心がけたのであります。そしてそのことは如何なる佛縁によるのか、遂に私を淨土教の、然も法然上人の膝下まで導いて呉れたのであります。

私は法然上人を中心として勉強し始めました。それは濃然と佛書を読むのと違つて最も熱の籠つた、然も能率の擧る方法でしたが、然し法然上人の信仰や思想を知ることが決して容易ではありませんでした。上人を知る上に就て最も重要なものは申す迄もなく上人御自ら書き遺された文章であります。然し七八百年も昔の言葉、然も私共には耳遠い佛教の

言葉に充ちた文章は現代の、そして素人の私には甚だ難解なのであります。淨土教徒の必ずや讀せねばならぬ「選擇集」さへ一通り讀むのに中々骨が折れます。又「勸修御傳」の姫き比較的やさしく書かれた傳記でさへ一つ／＼の熟語を知るには字引無しでは済まされません。黒田、望月兩師御編纂の、われ等の寶典たる「法然上人全集」を私は早く手に入れたが、どうも六つかしくて困つたのであります。法然上人は大好きで、その御遺文を讀むだけで楽しいのですが、さて細いことについては何も辨らず、況して教義といふやうなものに就てはその大綱を窺ふこともむづかしいと思つたのであります。勿論信仰の眞髓に他方信心の法門は七面御具い理屈を知らねばならぬ必要は無いのですが、然し知識から、どうしても體系的に、分類的に、整然とした所詮知識として一通りは知っておきたいと思ひます。そういふ慾求から石井教道先生の「淨土の教義と其教團」や前田聰瑞先

宗教として法然上人の淨土宗が開顯されるに至つた。之れは全く日本大衆の持つ獨特な國民性に合致したもので、最も簡單明瞭な最易最高の教であつたから、念佛の聲はまたたく間に全國に津々浦々に擴まつたのであり、且つそれに刺戟されて眞宗日蓮宗等の新宗教が現はれることにもなつたのである。是れは正に我國の宗教的一大飛躍であつた。

是の故に私達が今度「淨土宗讀本」を書くに當り、その歴史教義は元より特に實踐的方面の國民的年中行事が、淨土教と全く不可分の關係にあり、國民生活と不可離の狀態にあることを知つて、今更乍らに驚きの眼を見張らざるを得なかつた。

私達は確信を以て「淨土教こそは世界の宗教の最高頂に居るものである」と斷言したい。願くは世界の凡ての人々が此の純日本宗教の眞髓を味ふことに依て、正しい人間生活を完ふせんことを祈つて止まないのである。

生の「法然上人の思想と宗教」には何れも非常な恩恵を蒙りました。殊に石井先生の手に入れ難くて、東京の先輩に頼んで漸く搜して頂いたこと等も今は有難い思ひ出の一つになつて居ります。搜したと云へば、上人に關する傳記等を手當り次第に讀んでみました。頃、明治四十四年發行の、木下尚江氏著「法然と親鸞」といふ四六判の古臭い本を手に入れたことなども嬉しいことの一つであります。

法然上人を知るには、どうしてもその時代を知らねばなりません。平安末期のあの特異な時代相を描いては上人出世の意味も價值も分らなくなります。藤原時代、鎌倉時代の佛教を知ることは、やがて日本の佛教全體を知ることになります。上人を知らんとする慾望と必要とは、それからそれへと延びて行きます。先づ近いところでは、淨土教直接の源流を知りたいと思ふことは、どうしても惠心僧都や親鸞聖人を調べないではあられなくなり、又法然上人を一生涯法敵と目指した日蓮聖人の主張も聽かないでは居られませんし

曹洞宗の開祖道元禪師の語録には嚴く他力門淨土門に就て鋭い批判がしてありますから、この様な反對派の主張を聴くことも淨土門なり法然上人なりを理解する良い資料でありますから捨てゝおく譯には行きません。

それから更に、淨土宗徒の私共としては、淨土宗なる一宗派が法然上人以後七百年如何なる歴史を述べて現代に及んだかといふことも知りたい所です。それから今淨土宗は如何なる現況にあるのか。本山は何處と何處で、それにはどんな由緒があるのか。又宗門としてその組織や行政的なことは如何に行はれて居るのか。現在、社會的に淨土宗は他宗と比べて、どんな位置と特色とを持つて居るのか。そんな事迄私はいろ／＼と知りたくなりますので、書物を求めたり、お坊さんに質問したりしました。

これ等、私の要求するやうなことで、又質問したいやうな事柄に關しては、何れも専門の著述が、有りますが、それ等は何れも相當に浩瀚でありまして、素人には中々簡単に讀め

發行者の言葉

淨土宗とはどんな教義と信仰とを持つてゐるのか？ 佛教の眞髓とはどんなものなのか？ それは體系的に知ることは我々の持つてゐる信仰を特に確かなものとするために是非とも必要です。然し今までにはそのために随分むづかしい本や經文を澤山讀まなければならぬものゝやうに考へられてゐました。また實際その通りでした。つまり今までにはこの「淨土宗讀本」のやうに一冊で歴史と教義とその實踐が體系的に纏められており、且つ誰れにも解るやうに書かれた書物が無かつたからです。凡ての信仰ある人、信仰を求めたる人、佛教入門を志す人々が求めに求めてゐたこの難問題がこの「讀本」で立派に解決されたのです。

『淨土宗讀本』こそ現淨土宗第一流の理論家と信仰家が解り易い言葉と思想を以て深奥な教理を説明するために、研究に研究を重ね、慎重に慎重を期して作り上げた讀本です。この「讀本」をお讀みになればそれだけで淨土宗なるもの、ひいては佛教なるものゝ全貌が貴下の胸中に組立てられ、信仰の道はそこから指示されます。各家、各寺に一冊をそなへて信仰と修養の源泉として下さい。

ません。今迄私の購べた狭い經藏では、一淨土宗徒として、素人としての私の要求を満足させて呉れるやうな都合の良い書物は一冊もありませんでした。

これは少し私が慾張り過ぎるかも知れませんが、私の蔵んで居たのは、淨土宗の歴史、何故法然上人の出現が日本佛教史上に獨特の價值があるのか、その教義、その意味、その基礎といふやうな事を最も簡潔に平明に、然も體系を立てて述べ、そして又俗人たる私共が宗門の現勢が一目に分るやうに書かれたものつまり現代の淨土宗が持つ内容も外廟も、過去の事も現在の事も一切が、要領よく、一冊にまとめてあるものでありました。それは宗徒として信仰の軌範になり、正しい宗教理解の基礎になつて、日々の信仰生活の指標となると共に、宗門全體をして一致團結せしむる所の信仰目標ともなり、教科書ともなるものを、欲しいと思つたのであります。

ところが今回、幸ひにもこの長い間待ち置けた書物が出版されるとのこと、私は世に出る日を翹首して待つて居る次第です。殊に著者たる大野法道先生、中村維康先生、前田麟瑞先生は既にその多量の御著述に於て又誌上に於て親し味深い方々で、然もわが宗門第一流の學者として權威ある方々ですから尚更、嬉しく存じます。

量質共に破格の讀本

淨土宗讀本は最初の豫定では菊版で三百頁位、定價も二圓以内にするつもりでとりかゝつたのです。ところが、とりかゝつて見るとこの讀本の内容たるや前人未踏の地を開拓するやうなもので、最初豫定の枚数ではとても著者として満足するものが出来ないと云ふことが、解つて來たのです。が、兎に角、本會として後世に傳へるべき讀本として發行するものである以上多少の犠牲は止むを得ないと幹部の衆議一決して充分に著者に書いて頂くこととしたため、出来上つたものは遂に最初の豫定より五割が膨張して本文四五〇頁近いものになつてしまひました。本會の出版物として量に於いても價に於いても記録破りのものです。それでもこの時期に、この定價は破格の奉仕であること、特に會員には定價の割引でお領することをお銘記の上御愛讀をお願いいたします。



談相仰信

信仰過程・現身往生・その他

三問

一、彌陀の本願を聞いて、

自然に念佛が口を銜いて出て心から、行住坐臥念佛三昧に入つて疑心不生に至るまでの信仰過程を話して頂き度いと思ひます。

二、淨土往生即ち涅槃に入る境を死後に限定したのは何う云ふわけですか。本願に乗扱すれば、現身にすでに往生成佛可能なりと考へられますが。

三、往生即成佛の境が阿彌陀經などに依ると、はつきりしませぬが、淨土に階級のある筈がないと思ひます。

(荏原・下神明・上島生)

三答

一、お賀ねの意味がよく判りません。疑ふ心の起らない状態が「信仰」です。彌陀の本願を聞き、自然に念佛が出るやうになつたら、もう疑ふ心は起らない筈です。念佛が申されても「信するが如く信

ぜざるが如く」の心境では、まだ本當に信仰に入つて居るものではありません。従つてこの御質問の意味は不明瞭です。

然し求道入信修道の信仰過程を御賀ねになつたとして簡單にお話して見ませう。

求道時代はまだ信仰を求めて居る時で、たとへ念佛して居ても、まだ本當の念佛ではないわけです。口だけは「南無阿彌陀佛」と云つて居るが、心ではまだ阿彌陀佛が信ぜられず、阿彌陀佛の慈悲も判らず、心から歸命する氣持にもなれず、唯だ信仰に入りたい氣持だけで、念佛の眞似事をして居るのです。何とかして「信仰に入りたい」と奮闘しけれども、外に方法がないのでお話を聞いたり、本を讀んだり時たま念佛して見たりと云つた状態です。

然し乍ら機が屈せず求めに求め抜いて行く時、段々熱が出て外目には瘡んど氣狂ひの

擔 當
中 村 辨 康

やうにさへ見えます。かうなると恰度那が溫められて淨化するやうに、機縁が醇熟して如來の大慈悲が信ぜられて參ります。之れが入信であります。だがこの入信状態には色々有つて一概には言へません。強弱深淺頓漸等の差別があります。また罪惡觀の強いもの、生命觀の強いもの、或は信機の強い人、信法の強い人など、色々區別されませう。

また一度信仰に入つても其の喜びは月日と共に冷靜になつて、ただ單に自分の魂の絶對安心だけでは物足りず、もつと徹底したい氣持の段々濃厚になつて行くのは、人情として誰でも感ずることです。それで行住坐臥に念佛にいそしむ心になり念佛が忘れられなくなり、もつと進んでは念佛三昧の心となりた氣持にもなります。之れ修道時代の心境です。是れからのことは其の人の修養次第心かけ次第で色々の心境がありませう。



談相仰信

二、往生とは「捨此往彼蓮華化生」のこと
で、無論死後のことを云つて居るのです。それは恰度「涅槃」の徹底した状態を「無餘涅槃」と云つて死後に限定して居るのと似て居ります。現身の信仰状態をば「往生」とは云ひません。淨土教では多く具體的に解釋するからです。但し法然上人も一念に一度の「往生」と云つて居りますから、權衡的に申せば念佛して居る瞬間は、親鸞上人の「娑婆の穢身はかはらねど、心は淨土に棲み遊ぶ」と云ふ心境ですけれども、其の信仰状態をば「現身往生」とは言はないのです。何となれば念佛をやめて居る時は直ぐさま煩惱多き元の凡夫となるからです。

三、往生既に成佛とは眞宗などで言ふことで、淨土宗では申しません。往生しさへすればいゝのですから、何も事改めて聖道門流の成佛と言ふ言葉を使はなくてよいでせう。また階級は大經觀經に三輩九品を

説きますが、それは信する者に向上心を促す勸諭の言葉であつて、昔から「無量品」と言つて居るやうに、唯だ淨土往生でよいでせう。成佛など言ふ言葉に提はれる必要はあり

肉食妻帯と魚のお供へ物

今日世の中で、男僧には肉食妻帯を許して居りながら、尼僧にそれを許さないのは氣の毒です。尼僧だけは何故破戒の罪になるのですか。

二問

私は今頭が雙でありますが、先年如何なる悪縁か、一人の母親と一人の子供とに死なれ、あとに残つて居るのは私一人で、實に悲しくなりません。母は本當に信心者で、八十八歳で亡くなりましたが、何う云ふものか、魚が好きで朝から魚を喰べて居り、また日課稱名を唱へる時は食時さへ忘れて佛前に向つて居りました。それで母や子供の供養に、私は佛前に鳥賊のさしみや鰐の子を上げて居りますが、これはどう云

ふ罪になりますか。御回答下さい。

三答

戒律を受けて居る人ならば、男女の區別なく肉食妻帯等は「破戒」の罪を犯したことになります。随つて今でも戒を受けて居る男僧は無妻であり、菜食者であり、また食事朝のお粥、盥の一汁一菜の御飯以外には何も頂きませんし、着物も絹物や美しい色のものは着ず、鼠毛縮か鼠色の麻布かです。之れは尼僧でも同じです。然し戒律を受けて居ない尼僧は今も肉食もしますし、色の衣も着ます。唯、男を持たないだけです。この男を持たないのは戒律を受けなくとも自他共に清淨生活を要求して居るから

ません。但し阿彌陀經には成佛といふ言葉こそありませんが「無上正覺」を遷轉しないことを二度も云つて居ります。

(渡島・北海生)



談相仰信

で、大徳師主を持つ時は還俗するやうです。若し尼僧さんが男を持てば、諸經等に觸む人が無くなるから、事實上僧形を

してもいなくても何つちでもよいことになり、また生活は男が保證してくれませうから、敢て僧形を續けて居る必要もない譯です。

昔の平安朝時代には男僧で妻子のあつた者が相當あつたやうです。例へば後醍醐の如き、或は澄憲法親の如き社會的に有名人でも公ひらに妻子を持つて居ました。それだから親鸞上人が肉食妻帯の創始者ではなかつたのでした。謂はゆる無戒名字比丘で殘は出家の姿でも、生活は在家と埒しなかつたのです。

ところが多分徳川時代からだらうと思ひますが、幕制で一向宗以外の僧侶に對しては、一嚴に肉食妻帯を禁じてしまひました。肉食の方は不徹底だつたけれども女犯は非常に嚴重で、犯したことが發見されれば日本橋の櫓のたもとにさらしものにされて、その反省を促

したものです。然る處、明治になつて太政官布達で「肉食妻帯勝手たるべし」と、各自の自由意志に委せることになつた次第です。夫れでも習慣は中々抜き切れず、出来るだけ隠すやうして居りましたが、段々公ひらになり今のやうになつてしまつたのです。

元來佛教の律は數國の規律であつて、それも始めはまとめられて居無かつたけれども、段々人數が増加するにつれて、弊害を生じた爲に、規律を作り作りして、男の二百五十戒、女の五百戒と云ふものが出来、別けても殺生、偷盜、邪淫、妄語の四は最も重い罪として、之れを犯したものは教團から放逐し其の罪は永久に仲間に入れたなかつたのです。然し自分の都合で家に還つたものは、もう之の規律を守る責任がないから、たとへ妻を娶つても無戒であるから罪にはならなかつたのです。

また「斷肉」と云ふことも初めは徹底的なものでなく「三種の不淨肉」と云つて、自分の爲に殺すのを見、または聞き、またはその疑ひのあるらしい肉だけが禁じられて居たの

でした。後に大乘教が起つてから、肉を喰らへば「慈悲心」を失ひ、諸罪を犯す原因ともなり易いからの理由で「禁肉食法」が出来た譯です。事實慈覺國では殊更、斷肉を食ふやうな生活要求はなかつたらうと思ひます。

要するに營澤であつたわけです。然し溫帶地方になるとさうは行きません。保温の必要上、油ものとか魚肉とか自然に要求されるのですし、更に寒帶地方では是非共獸肉が身體に要求される譯ですから、一概に其の是非を論ずることは出来ないかと思ひます。嚴密に云へば野菜だつて米だつて生きて居るのです。

私達は他の澤山な命を殺して自分の食物にして居る譯で、獸肉や魚肉ばかりを問題にすることは片手落ちであり、一切の食物に就て凡て其の淨不淨が吟味されなくてはならぬ筈です。然るに肉類のみが問題にされて居たのはまだ考へが不徹底だつたからだと云へないこともありません。

ことに淨土教では、元より戒律を條件として居るのでなく、法然上人も「魚くふもの往



談相仰信

生をせんには頼ぞせんずる。魚くはぬものせんには頼ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず、唯だ念佛申すもの往生はするぞと、寂空は知りたり」と云はれ、また「末法の中には持戒もなく破戒もなし、唯だ名字の比丘ばかりありと、傳教大師の末法燈明記にかき給へるうへは、何と持戒破戒の沙汰をばすべきぞ、かゝるひら凡夫のために、おこし給へる本願なればとて、いそぎ／＼名號を稱すべし」と云はれたやうに、念佛の前には、それ等は第二義的なものです。されば「妻がなくては念佛が申されないやうだつたら妻をもらつて念佛したらよい」と云ふやうなお言葉もあるくらゐで、凡て念佛唱名第一主義、念佛の助けになることなら、何事も問題にはされないのです。

ですから、お母さんへの孝行の爲なら烏賊の刺身をお供へするのによいでせう。鰻の子も結構でせう。然し餘り臭いもの

は遠慮して、見た目も美しく上品なものをお供へするのが、常識的に考へてもいいと思ひます。

花祭りの集ひ

来る四月八日の覺尊降誕會には本會員恭支部主催で花祭りの集りが催されます。聖覺と共にしながら、世尊降誕の意義、佛教信仰と現代の世相などについて、心ゆくまで語合ひませう。當日は

本會理事長

中村辨康師

大正大學教授

佐藤良智師

大正大學教授

佐藤賢順師

などが出席して皆さんと共に語り合ふ筈です。年齢職業を問はず男女を問ひません、どなたでも御參加下さい。

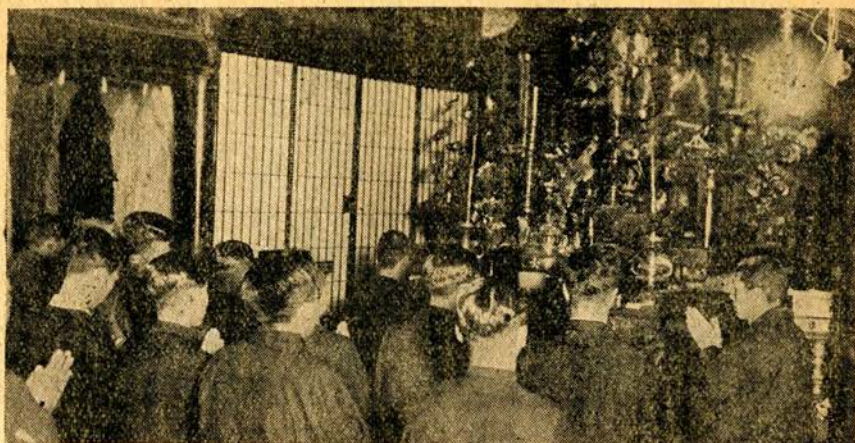
時 四月八日午前十一時より

所 芝公園 明照會館樓上にて

會費 金壹圓也

準備の都合もありますから御出席の方は四月六日までには本會へ御申込み下さい。

(一五頁より) 戰國は生と死と紙一重なのだからそのやうな感が起るのだらう。今迄死んだように靜かになつて居たバスががや／＼喚き初めた。支那人達はバスの床にへばり付いて居たのだが戦争が止んだと見て動き初めた。それにしても様子が變だ。誰か怪我人でも出来たのかと。戰友達が近寄つた。先の一人が絶叫した。『やッ女がやられた』皆、戰友達はグキツとした。半島の女の人は腰に貫通銃創を負つて即死して居た。自分は何か小説的な運命でもあるかのやうに驚いた。先程迄兵隊をあれ程愛しました、この綺麗な婦人が花のやうに他愛も無く散つたのだ。それともつた今。他のものは手傷一ツ負はなののに何と皮肉な廻り合せなのだらう。戦争は死を何でも無く考へさせる半面其動機によつては非常に考へさせられるものであらうと、浸々思つた。



別時念佛に就て

七箇條起請文の中に

「とき／＼別時の念佛を修して心をも身をもはげまし調へすゝむべきなり。日々に六萬遍を申せば、七萬遍を唱ふればとて、唯だ在るも云はれたる事にてはあれども、人の心さまは、いたく目もなれ耳もなれぬれば

いそ／＼とすゝむる心もなく、明け暮れ心いそがしき様にとのみ、疎略になりゆくなり。その心をため直さん料に、時々、別時の念佛はすべきなり。然れば善導和尚も懇ろにすゝめ給ひ、恵心の往生要集にも、すゝめさせ給ひたるなり。道場をもひきつくるひ、花香をもまいらせん事、ことに力の堪へむに従ひて餽り参らせて、我が身をも殊に清めて道場に入りて、或は三時、或は六時などに念佛すべし。もし同行など數多あらん時は、替る／＼いりて不斷念佛にも

修すべし。かやうの事は各々事情に従ひてはからうべし」

と、法然上人もすゝめて居られ、御自身も毎年正月の恒例の別時を始めとして、此處彼處に別時をつとめられました。

またお弟子達も夫れ／＼時に應じ縁に應じて別時をつとめました。が、別けても空阿と云ふ人は、聲のよい同行四十八人と共に、諸所で別時を行ひ、濃山な人々を信仰に導いたので、法然上人も

「寂空は智徳を以て人を化するは猶以て不足なり。法性寺の空阿彌陀佛は、愚痴のものなれども、念佛の大先達として、あまねく化導すること曠し。我若し人身を受けば大愚痴の身となり、念佛修行の人たらん」と、空阿を推奨して居られます。

元より念佛信仰の中心は平生にあるのです

から、別時中心主義は間違ひでありますけれども、何分にも私達は凡夫です。色々の事に引きづられて信仰増進も仲々思ふやうには行きません。それ故、時には一心に念佛したいと思ふことにもなるのですが、是れ亦仲々思ひ切つて特別な時間を割くことが出来ませんし、やつて見ても一人では長い時間を續けることが困難です。

この故に例へ三人でも五人でも同行云ひ合せて集るより外に仕方がないのです。事實また實際にやつて見て、非常に奨励にもなり其の効果が自覺されるものです。

また古來から淨土信仰史上に名高い人々は何れも念佛に熱心でした。彈誓上人とか徳本行者とか稱念上人とか以入上人とか無能上人とか其他澤山な信仰篤い人達は、皆な非常に熱心な念佛行者であり別時をやられた方々だつたのです。

私達は平素仕事にしろ考へごとにしろ、一生懸命やるつもりでも、容易にその事に三昧にはなれません。段々心が馴致されて行つ

て始めて熱が出て来るものです。念佛に於てもまたさうで、別時を行ひましても初めの一日にまだ心をおちつかず、中々念佛になり兼ねますが、二日三日と重ねて行きますと、心が自然に如來様の方へ傾いて、或る程度の殊勝を得られます。

されば法然上人は

「妄念餘念をも顧ず、散亂不淨をも云はず唯だ口に名號を唱へよ。若し能く稱名すれば、佛名の德として妄念おのづから止み、散亂おのづから靜まり、三業おのづから調ひて、願心おのづから發るなり。然れば願生の心の少きにも南無阿彌陀佛、散亂の増す時にも南無阿彌陀佛、不淨の時にも南無阿彌陀佛、淋淨の時にも南無阿彌陀佛、三心の闕けたるにも南無阿彌陀佛、三心具するにも南無阿彌陀佛、三心現起するにも南無阿彌陀佛、三心成就するにも南無阿彌陀佛是れすなはち決定往生の方便なり」

と、念佛すればおのづから身口意の三業が調つて、三心即ち信心が現起し成就すると云は

れて居りますが、かうした殊勝は「別時」に依つて今も尚ほ多くの人々が経験するところであります。

信仰上の理解も或る程度必要ではあります。しかし實際なき理解は一朝事あつたとき何の役にも立ちません。何うしても殊勝に依て「魂」の解決をして置かねば駄目です。平素の無事の時信仰なき人と大した相違はないかも知れませんが、有事の際に於ては格段な差異があるのです。一度人間に生れて、此の逢ひ難い「みのり」に遇ひながら、それを我がものとすることも出来ず、永遠に浮ぶ瀬のない「六道輪廻」の渦巻の中に巻き込まれ去つてしまふことは、誠に遺憾なことです。本會はかうした憾を遺したくない方々への機縁を作るため、別項の如き別時三昧修養會の計畫をたてました。本會としては初めての試みであります。地味ではありますが効果の大なるものあるを希念して止みません。

(二九頁に別時會の案内があります)



智悲兩全の觀音樣

——般若心經講義(第三講)——

中 村 辨 康

(五) 觀音さまに就て

觀自在菩薩

觀自在菩薩とは俗に云ふ「觀音さま」のことで、梵名は「阿縛盧枳低薩伐羅菩提薩埵摩訶薩埵」で「アバロキティシユバラ」を譯して「光世音」とか「觀世音」とか「觀自在」とか「觀自在」とか言つたのですが、譯者の考で、例へば羅什は「觀世音」とし、玄奘は「觀自在」としたままで、畢竟原語の取扱ひ方の相違に過ぎません。

昔しは「觀自在」は正直な譯しかたであり「觀世音」の方は内面の意味を強く云ひ表はしたものと云つて居ました。が、近代梵語學者の研究に依ると「觀」の原語を「觀ること」とするか、または「觀る者」とするかで異なり、また

「シユバラ」を「イシユバラ」自在者と譯するか、或は「スバラ」即ち音と譯するかで違ふものだから、畢竟兩方とも傳本の相違から來たものであつて、どちらも間違ひではないと云つて居ます。

それは何れともあれ、觀音信仰は彌陀信仰の先驅をなすものと云はれ、印度、西域、支那、西藏、南洋、日本等に弘まり、特に民衆によく廣く親まれて居るところに特色があります。

印度では近頃發掘されたエローラ窟、ケネリー窟、鹿野苑などの廢墟から聖觀音、十一面觀音等の觀音像が發見されて居り、支那では十一面、千手、如意輪、不空羂索、准胝、哈喇、水月、魚籃等の觀音信仰が行はれ、我が國では推古天皇の三年に勅して觀音像を彫刻せしめたのが初まり

で、それから法隆寺の夢殿、四天王寺金堂の救世觀音、諸國分尼寺の觀音、東大寺羅索堂の不空羅索觀音、唐招提寺盧舍那佛の脇侍千手觀音、長谷寺、觀世音寺、石山寺等の十一面觀音、それから降つて坂上田村麿の清水寺とか或は興福寺の南圓堂、醍醐寺の觀音堂とか、殊に平安朝中期頃から彌陀信仰が盛んになるにつれて、觀音様は「聖衆來迎」の先頭に立たれる重要な役目の御方で衆生を乗せる蓮臺をお持ちになつて居られ、阿彌陀様の脇士として慈悲の方面を御擔當になられる佛様として、一層親しみが深くなり、彫刻に繪畫に澤山な優秀作品が出来、現在國寶になつて居るものだけでも四百五十からあるさうですが、このやうに廣く日本國中にその信仰が行き渡つて居るのであります。ことに面白く思はれるのは、阿彌陀様や大日様などは宗派的色彩が濃厚ですが、この觀音様になると何の宗派にも親しまれて、少しも敵性が持たれて居ないことであります。之れと云ふのも謂ゆる「普門示現」で、至る處にそれに應同して慈悲の手を指し延ばされるからであります。う。お姿にしても六觀音、十五觀音、二十五觀音、三十三觀音と云つたやうに色々あつてお首も一首、三首、五首、七首、十一首、御手も二臂、四臂、六臂、八臂、十二臂、

二十四臂、四十臂、百八臂、お眼も二目、三目、四目、九目乃至百八目、千目など多數に表現されて居ります。一般に人口に膾炙されて居る「六觀音」や「三十三觀音」さては床の間の飾りとして懸物、置物の魚籃、龍見、龍頭、持經一葉、岩戸、蛤喇、瀧水など、經典や儀軌に出て居ない觀音様まで出て居ります。

ところが其の持ち物を見ると、多くは蓮華であります。殊に寶冠には阿彌陀佛を頂いて居りますことは、それが觀無量壽經に説かれてあるばかりでなく、觀自在菩薩三世最勝心明王經や一字頂輪王經第三や補陀落海會軌や大日經第一具緣品や不空羅索神變眞言經第二や眞言瑜伽觀行儀軌や聖觀自在菩薩念誦像軌等々にも出て居ります。また密教では阿彌陀佛と觀音菩薩とは同じ佛で唯だ因位と果位との相違だとさへ云つて居ります。即ち大日經疏第五には「如來の究竟にして十緣生句を觀察し、この普眼蓮華を成ずることを得、故に菩薩と名づく。頂に無量壽を現するは此の行の極果なり。即ち是れ如來の普門方便智を明すなり」とか、また理趣釋卷下には「得自性清淨法性如來は是れ觀自在の異名なり。則ち

此れ無量壽と名づく。若し淨妙の佛國土には成佛の身を現じ、雜染五濁の世界に住しては則ち觀自在菩薩となる。

と云つて居りますし、また或る經典の如きは阿彌陀佛を觀自在王如來と云つて觀自在菩薩の本師として居るものもあります。

かう云ふところから眺めますと、觀音菩薩は淨土教とは非常に關係を持て居り、念佛信者に取つては阿彌陀佛の脇侍者であり、第一位の補處の菩薩即ち阿彌陀様の後繼としての第二の阿彌陀佛であり、また無量壽經には「觀音勢至その勝友となる」と説かれてあるやうに、私達の勝れたる友であり、大先輩であつて常に念佛信者を護つて居て下さるのですから、その因縁は一層深く一層親しまれてよいわけです。

また觀音様はよく「女の佛様」のやうに誤解されて居りますが、それ程、やさしい慈悲深いお姿をして居ります。然しよく見ると鬚が書いてあり、また馬頭觀音の如きは忿怒の相を示して男々して居りますし、觀音様の本縁は悲華經第二に依ると

「阿彌陀因位に轉輪聖王たりし時、千子あり。其の第一

太子を不响と名づく。出家して觀世音と字し、彌陀入滅の後、成道して遍出一切光明功德山王如來と號し、其の世界を一切珍寶所成就と名づけ、師佛に代りて教化を總攬す」

とありますから、女らしく見えて居ても男なのです。

あの髪の毛を長くし、飾りをつけ、美しい着物を着て居るのは在家の姿であつて、地藏菩薩や實在の菩薩などを除いた他の多くの菩薩は何れも出家相ではありません。つまり大乘佛教では僧俗を區別して居ないことを示す證據なのです。

教と云ふものは在家だから出家だからと云ふ區別のあるべき筈もなく、女だから男だからと云ふ區別のあるべき筈もありません。一切平等なのです。かの勝鬘夫人の如きは勝鬘師子吼一乘大方便廣經と云ふ立派な教法を説いて釋尊の稱讃を蒙つたとさへ傳へられて居ります。

但し婦人に對する「五障」と云ふものがありますがそれは法華經第四提婆達多品に出て居るもので、梵天王と帝釋天王と魔王と轉輪聖王と佛身との五になることが出来ない」と云ふのです。然し超日月三昧經卷下では、婦人であつても、勇猛少欲なれば帝釋天に、清淨行を奉じ四禪に達へ

は梵天に、長上に謙順し二親に孝行なれば魔天に、菩薩道を行じ衆生を慈愍すれば轉輪王に、菩薩心を行じ大慈悲心で起し六度を行じ覺を得れば佛になれるが、若し婬恣無節なれば梵天になれず、雜惡多慳なれば帝釋になれず、輕慢不順なれば魔天になれず、匿態多く清淨行なければ轉輪王になれず、色慾に著し情におぼれ匿態有り身口意異れば佛になれぬと云つて居るから、畢竟するに男でも女でもそれは同じことであつて、女だからと云ふ特別の條件ではなかつたわけですよ。

それは何れにせよ、觀音様は在俗の姿であり、且つ婦人とも見られ易い程の柔和なお姿をして居るのですから、大衆的であり一般的であつて、何となく私達平凡人には取りつき易い感じが致します。

然るに此の心經は般若を説くものですから、智が中心となつて居るのに、何うして觀音様が主役を演じて居られるのか之れが一寸變つた點で、茲がまた觀音様が單なる慈悲だけでないことを思はせて居るものであります。

それも畢竟「觀世音」又は「觀自在」の「觀」が「妙觀察智」の「觀」であつて、單に「見る」の意味でなく「心で見るとか「よく見る」とか云ふ深い觀察眼を意味する

ものでもあります。

かの「六觀音」の「六道」に配當されて居るが如きも、見やうに依つては正しい智的觀察を以て迷ひの姿を抜け出すことを教へて居るものとも受取られます。

千手千眼觀音——地獄道(或は聖觀音に)

聖(正)觀音——餓鬼道(或は千手觀音に)

馬頭觀音——畜生道

十一面觀音——修羅道

准胝觀音——人間道(或は不空羼索觀音に)

如意輪觀音——天人道

地獄道は苦の最極であります。苦の最も大なるものは肉體と經濟と義理とであります。茲に活動能力の充分な手と、觀察能力の充分な千眼とがありさへすれば、其の苦しみから、當然解放されるにきまつて居ります。

餓鬼道は食欲の現はれですが、その食欲は私達を常に盲目にし事物を正しく見ることが出来ないやうにして居りますから、何時も、其處に苦を伴ふのであります。だから聖觀音の正智を念することが必要となる譯です。

また畜生道は不覺醒の極限であります。唯だ五欲の率るまゝにひきづられて居て、少し位の注意や小言では中々覺

醒しません。是の故に馬頭觀音は忿怒の相を現じて大いに私達を叱咤して呉れて居るのです。

修羅道は争ひの道です。争ひは自我主張から來ます。自我主張は一方的な見方からするものですから、公平に見て絶對なものだとは云ひ切れません。また争ひなるものも、謂ゆる君子の争ひならばよろしいが、兎もすれば意地張りになりたがるものだからいけないのです。そこで之れに配するに十一面觀音を以てして居るのは中々面白いと思ひます。

十一面觀音のお姿は前三面は智通の柔和な菩薩相でありますが、左三面は忿怒の相であり、右の三面は皆な牙を出して居ります。然るにうしろの一面は何うかと思ふと、之れはまた意外にも大笑ひをして居るのです。之れなどは随分人食つて居ると云つて云へないこともありませんが、此の十面の頂上に乗つて居る一首一面は佛相即ち覺醒相であるところに此の十一面觀音菩薩の眞面目が躍如として輝いて居るわけで、茲に到つて始めてこの菩薩の尊さが判明しおのづから頭が下るのであります。

次に人間道に配するに准胝觀音を以てして居ますが、准胝とは「清淨」の意味で、お姿は三目十八臂であります。

す。人道は五倫五常の道を守つて居さへすれば清淨であります。此の軌道からはづれないやうに行爲したいものです。

また准胝佛母と云つてお乳の特にふくらんで居る佛像があります。佛様のお母様を貴んだものです。私達人間は理論的に云つて誰でも佛子でありますから、「日も早く具體的の「佛」となるやう「佛母」たる「准胝觀音」に祈誓をこめることもよいことでせう。

次に天道には如意輪觀音が配されます。轉輪聖王の持ち物である輪寶を持つて居られるので此の名があるのです。輪寶は如意輪寶と云ひ意のまゝに四天下を自由自在に廻つて、之を平和裡に平定することが出来る寶と云はれて居ます。天道が單に自己の悦樂のみにふけて居るのを反省せしめて、廣く天下國家の安寧幸福に努力しなければならぬことを示して居るのであります。

心經では此の「智」の觀音様が中心であると共に、脇役はやはり釋尊のお弟子の中でも「智慧第一」の稱ある舍利弗尊者であり、お話の中心もまた「般若」(即ち智)に關することであります。

然し乍ら「妙智力」と稱せられる觀音様は、常に眞觀、

清淨觀、智慧觀を以てよく諸の黒闇を照破し、黒闇の依つて來たれる眞相を指摘して呉れますが、その上に慈觀及び悲觀に依つて一切世間の苦惱苦厄を除滅する「施無畏者」となつて居られるのであります。觀音經即ち普門品に無垢清淨光なる慧日は、諸闇を破つて能く災風火を伏し、普く明らかに世間を照らす。悲體の戒は雷震、慈意の妙は大雲、甘露の法雨を澆いで、煩惱の欲を滅除すとありますやうに、智悲兩全、眞に阿彌陀佛の補處の菩薩たるにふさはしいお方であります。

此の觀音様が「智」の深般若波羅蜜多を行じた時、天地一切の諸現象を照見せられて其の眞の「空相」を諦觀されたことから、此の「心經」が初まるので、一見智的展開のやうに見られ、古來から多くさう云ふ方面の解釋がなされて居りますけれども、佛教の、智の裏に悲があり悲の裏に智のあるべき建前から、之れを單に一方的に智の方面にのみ眺めては、謂ゆる盾の半面で不完全ではなからうか。此の智悲兩全の觀音様が主役であることを常に念頭に置いて、この心經を味つて行くのが本當ではないでせうか。

智悲兩全の觀音さま。

それはまた私達念佛信者の大先輩なのであります。

S.S.S.

金はンベ金 亂賣す 優にンベ金
金合スエンサる ！をンベ金



¥150以上

筆年萬金・スエンサ ★

編輯後記

◆本部事務所には年度變りを経て、多少人事の移動があつた。

◆本會創立以來、奉仕してくれた東慈道君と金孝敬君が榮轉々出した。今後とも外部にあつて從來通りの支援をしてくれる。長年の勞苦に對して、讀者諸賢と共に深く謝意を表する。

◆それに代つて新に一瀬秀雄君がはいつてくれた。一瀬君は作家一瀬直行君の弟で、支那事變勃發後間もなく出征して、盧山、南昌方面に轉戦してこのほど歸還した陸軍中尉である。紙上を藉りて一寸御紹介申す。

◆昔は老練の道瀬幸雄君と新銳の一瀬君とで相補して、庶務會計編輯と二人三脚をつとめてくれる。一同陽春を迎へて新しい活

躍に待機してゐる。(佐藤)

◆本誌は讀物を多くして見ました。さしゑや寫眞も從つて多くなつてゐます。面白くてためになる雑誌と云ふのが本誌の目的の一つですから、この方針をもつと押し

すゝめて行き度いと思ひます。表紙は齋藤清菫伯に依頼したものが出来ておつたのですが、印刷その他の關係で本誌に廻してもう一度前號と同じ意表のものを使ひました。來月の表紙は面目一新します。

◆渡中將絶筆の名號「はかつて本誌に寄稿せられたことのある渡中將閣下の深い信仰の一面を語られたものとして興味ある讀物です。また『警乗兵』の筆者は本誌の挿繪を書かれてゐた大羽四郎氏が實戰の體驗を繪と文につ

ゞられたものです。

◆吉田絃二郎先生には次號よりは隨筆を掲載して頂くことになつております。(道瀬)

◆本會出版物の御註文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御註文の場合には種類、部數、代價を格書で明瞭に御書き下さいませう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手から代金引替は一切お断り申上ます。

◆その他の問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願ひします。

◆會員で御住所御變更の方は現御住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社
東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年三月三日印刷納本
昭和十年四月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讀仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢
(送料五厘)

會費 金一圓二十錢
一ヶ年 (送料不要)

淨土宗管長

郁芳隨圓猊下序

大野法道
中村辨康
前田聽瑞
共著

淨土宗讀本

菊版四五〇頁・總クロース装

本文五號バラルビ

挿繪寫眞入

定價二圓五十錢

送料二十二錢

第一編 歴史

- 第一章 釋尊の生涯
- 第二章 佛教の發達
- 第三章 法然上人傳
- 第四章 二祖から現代まで

第二編 教義

- 第一章 淨土の教義
- 第二章 信仰の對象
- 第三章 西方の淨土
- 第四章 信仰の獲得
- 第五章 念佛の意義
- 第六章 信仰の生活

第三編 實踐

- 第一章 生活義としての念佛
- 第二章 信仰を方向づける爲の宗派と寺院
- 第三章 寺院の構成及び機能
- 第四章 信仰修養に必要な諸準備
- 第五章 信仰修養法としての行儀
- 第六章 人生の最大儀禮
- 第七章 祖先への報恩行
- 第八章 信仰増進の方法

淨土宗の教義は？ その實際は？ その歴史は？ その現狀は？ つま
い、淨土宗が持つ凡てのものを、萬人に解るやうに、立派な體系のもとに説
いたのがこの讀本です。しかも執筆者は現淨土宗の第一流理論家と信仰家で
永く後世に残る定本とするために何回も何回も協議を重ねて、苦心練磨の結
果出来上つたものです。校正も印刷も製本も慎重を期してやりました。です
から、信頼して讀める上に、淨土教義に就ての正しく廣い智識が得られ、書
架に飾つて恥しからぬ書物です。正しい教義・信仰を求められる人、淨土教
に就いて知り度い人々は勿論、宗教とは何かと迷はれてゐる人、時局下僧俗等
しく自己の信仰を確固たる體系の上にすへるために讀んで頂き度い讀本です

一家に一本！
明るい家庭！

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著 (四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文 定價十錢
送料三錢 (品切)

中村辨康著 (四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活 定價三十錢
送料六錢

大野法道著 (四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人 定價十五錢
送料三錢 (品切)

中村辨康著 (四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本 定價二十錢
送料三錢

中里介山著 (三六版二五〇頁クロース装)

法然上人傳 定價六十錢
送料六錢

藤井實應編 菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄 定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田松二郎・岡本かの子
倉田百三・郁芳園圖著 (四六版總ルビ付)

我が信仰 定價六錢
送料三錢

佐藤春夫著 特製ノート型、天金
十二ボ總ルビ、三〇〇頁

別法然上人 掬水譚 定價四圓五十錢
送料二十二錢

法然上人鑽仰會編 (菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本 定價二十錢
送料六錢